島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第32巻　21頁～43頁　平成10年12月

幼児と絵本に関する研究（3）
－1歳児・後半期の場合－

足立　悦男*・足立　茂美**

Etuo ADACHI, Shigemi ADACHI
Picture Books in the Later Years－A Study of a Child One Years Old

〔キーワード：1歳児・後半期，絵本享受，言語習得〕

はじめに

1歳児は，絵本とどのように関わり，絵本をどのように受けとめていくのであろうか。それが人との関わりや言語習得及び知識の獲得にどのように結びついていくのであろうか。本研究は，1歳児・後半期の絵本享受の実態を，長女みぎわ（昭和52年 6月25日生まれ　以下M児と記す）の育児記録をもとに具体的に報告したものである。なお，M児の0歳期における絵本享受の実態については，「幼児と絵本に関する研究－0歳児の場合」（『大阪教育大学紀要』第36巻　第2号）に，1歳児・前半期については，「幼児と絵本に関する研究2－1歳児・前半期の場合」（『島根大学教育学部紀要』第29巻）に発表した。本稿は，それに続く継続研究である。

研究の目的

前稿「幼児と絵本に関する研究2－1歳児・前半期の場合」（本紀要第29巻）にも記したように，私（茂美）は，M児が生まれると，その成長の様子を，家事・育児・研究の合間をぬって記録し始めた。言葉が獲得されていくその瞬間々々に立ち会っている母親として，その一こま一こまをできるだけ詳しく記録にとどめておきたいと思ったからである。それは，恩師・野地潤家先生ご夫妻の研究『幼児期の言語生活の実態』Ⅰ～Ⅳ（文化評論出版1973～1977）に学び，それに触発されてのことであった。

私の育児記録は，もともと絵本享受の実態を明らかにする目的で始めたものではなく，専門の幼児の言語生活・言語発達に焦点をあてた記録である。ただ，その中には，絵本享受に関する記述もあり，それらを拾い出して見ると，M児が絵本をとおして，言葉を覚え，周囲の人との関わりを深め，いろいろな事物や現象に興味をもつようになっていく様子をうかがうことができる。今，読み返してみると，期せずして「絵本享受の実態」の記録にもなっていたのである。そこで，一幼児の具体的な絵本享受場面の記録をとおして，絵本がこの時期の子どもの心や言葉の発達にどのように関わることができるのか，また，この時期の子どもへの絵本の読み聞かせはどうあればよいのかについて，明らかにしてみたい。

このような0歳児・1歳児の絵本享受の実態報告は少なく，事例そのものに資料的価値があると思われるので，できるだけくわしい報告をしたい。

なお，本稿は，「1歳児・後半期の場合」であるから，M児の1歳6か月から1歳11か月までの記録が研究の対象となる。ただ，M児は，1歳9か月から保育所に通い始め，同時に私も勤め（大学の非常勤講師）を始めたため，時間的な余裕がなくなり，それまでのような詳しい育児記録がとれなくなった。絵本の読み聞かせは続けていたが，1歳9か月以降は、絵本享受の実態の記録は少ない。

もうひとつその理由をあげるとすれば，一歳半をすぎるころから，M児の言葉の習得は加速度を増し，言語習得面の記録に主力をおいたために，絵本を読み聞かせた反応の記録は少なくなった。1歳9か月以降の記録については，このことを初めにおことわりしておきたい。

（＊記録に登場するM児は長女・みぎわ，Eは父親であ

＊島根大学教育学部国語科教育研究室
＊＊鳥取県立保育専門学院

る。当時，奈良市学園大和町の国家公務員合同宿舎1号棟，5階だてアパートの4階に住んでいた。）

1歳児における絵本享受の実態－M児の場合 1歳6か月

事例1〈昭和53.12.25（1歳6か月）〉

恒例の年末の家族旅行に出かける。西大寺－宇治山田間の近鉄特急の中では，『くまちゃんのいちねん』（かこさとし文と絵，福音館，1971，タテ15cmヨコ15cm）を見ている。まだ窓の外を見て喜ぶということはなく，空席になっている後ろの座席へ行って，イナイイナイバーをしてみたり，イスによじのぼって遊んでいる。西大寺の駅で，とまっているたくさんの電車を指さして，「電車よ。そら，動くよ。バイバーイ」と言って，電車を教える。「電車，どこにいるの？」と尋ねると，さっと左側の電車を指さし，さっと向きをかえて右側の電車も指さす。

事例2〈昭和53.12.25（1歳6か月）〉

宇治山田から伊勢・志摩スカイラインの観光バスに乗る。M児は，バスが動きだすと，すぐ眠ってしまうが，伊勢神宮で目を覚まし，境内を歩いて参詣する。金鶏が放し飼いにしてあって，M児は，「コッコ，コッコ」と走ってにわとりたちの方に行く。金鶏が寄ってくると，あとずさりして緊張する。神馬もいて，白い馬がじっとおとなしく立っている。はじめて見る馬にM児は，ものも言えず，私が「パッパッパッ，お馬さんよ」と言っても，黙って見ているだけ。馬のそばを離れると，抱かれていたM児が下りたがるので下ろしてやると，「パッパッ」と言いながら，あともどりして馬を見に行こうとする。

事例3〈昭和53.12.25（1歳6か月）〉

いそぶえ荘では，部屋のテレビを見て，親子三人楽しむ（＊当時わが家にはテレビは置いていなかった）。M児は，再放送の「ゴロンタ劇場」（＊NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」）を見て，呆然としたような顔つき。ときたま手足を動かすようにするが，テレビの画面に熱中しているため，動作が出てこない。時々，私の手を引っぱって，画面にもっていく。「ゴロンタだね」と言うと，こっくりとうなずき，また画面を見続ける。

事例4〈昭和53.12.26（1歳6か月）〉

鳥羽水族館でたくさんの魚を見る。ガラスの水槽の中で泳いでいる魚を指さすので，「タイタイよ」とか「おさかな。きれいねえ」と言うと，うなずいて，じっと見つめている。とくに色彩の美しい熱帯魚を喜ぶ。ペンギンをしばらく見る。「ペンギンさんが，おさんぽ…」と歌ってやると，体を左右にふって，調子をとりながら，ペンギンを指さして，「ウウン，ウン」と言う。見ているうちに，ペンギンが岩のふちから水中にピュッと白いふんをとばした。M児はそれを見て，「シッコ」と言う。「ほんとうだあ，シッコしたねえ」と答えると，得意そうに「シッコ」と言う。よほど印象が強かったとみえて，帰りの電車の中でも，「ペンギンさんがいたね」と言うと，すぐに「シッコ」と言う。家に帰ってからも，「ペンギンさん，何してた？」と聞くと，「シッコ」と言う。『とこちゃんはどこ』（松岡享子作，加古里子絵，福音館，1970，タテ26.4cmヨコ19.5）の中の動物園の場面を見せると，ペンギンの絵を指さして「シッコ」と言う。

事例5〈昭和54．1．3（1歳6か月）〉

午後2時すぎ。Eのゼミの学生4人（大阪教育大学4回生）来宅。M児は，ちょうどお昼寝からさめて来客に気づき，ふとんの中でうつぶせになったまま出て来ようとしない。目をあけてチラチラ様子をうかがっているが，「出ておいで」と言っても出て来ない。学生の一人が「みぎわちゃん，こんにちは」と，そばに来て声をかけると，急に大声で泣き出す。学生たちの姿の見えない玄関やEの部屋の方へ行って寄りつこうとしない。そこへEのゼミの3回生5人がやって来たのでまた泣き出す。台所にいる私にしがみつくようにして離れない。そのうちだんだん慣れてくるが，知らない人たちの前で，心をはりつめ緊張している姿をみるといじらしくなる。

『とこちゃんはどこ』（前出）を出してきて見ていた。だいぶ慣れてきたのか，みんなのいるところに近づいてすわる。「とこちゃん，どこにいるの？」と私が聞くと，指でさして教える。みんなが手をたたいてくれたり，「えらいね」とほめてくれたりすると，大きなためいきをつく。「これはだれ？」と絵本の中の人物を指さすと，「チャーチャ（ン）」（お父さんの意）「カーカ」（お母さんの意）と声に出して答える。しまいには，学生たちが絵本の絵を指さして，いろいろ聞いたりすると，答えるようになる。

事例6〈昭和54.1.3（1歳6か月）〉

（事例5に続く場面）人や自動車やいろいろな動物や木などの単純な形をくりぬいた木製のおもちゃが入った箱を自分で出して来て，くりぬきのおもちゃを1つ1つ取り出す。自動車が出てくると，それを走らせるまねをして「ブーブー」と言う。（中略）木のくりぬきが出てくると，それを私の方に差し出して「ウン？」と言って聞くので，「き」と言ってやると，黙っている。私が，学生たちの前で「あいうえお」を言わせてみようと思って，「〈あ〉って言ってごらん」と言うと，ちょっと黙っていたが，その木のくりぬきを見せて「ア」と言う。学生た

ちが笑うと，照れ笑いをする。私が「それは，き」と言うと，今度はすぐに「キ」と，はっきりした声で真似る。しばらく向こうをむいて遊んでいたが，木のくりぬきを持って振り返り，私に向かって，「キ」と言う。「そう，よく言えましたね。木ですよ」と言うと，うなずくようにして，繰り返し「キ」と言う。夜になって，学生たちが帰った後も，時々思い出したように，「キ，キ，…」と言ったり，わざわざ木のくりぬきを取り出して来て「キ」と言って見せたりする。一つの言葉を覚えた時の反復は，そばで見ていると，感心するほどである。『くまちゃんのいちねん』(前出) の中のいろいろな木の絵を指さして，「これも木よ」と教えてやると，私の後について「キ」と言ったり，自分で木の絵を指で押さえて「キ」と言ったりする。

事例 7 〈昭和54.1.5（1歳6か月)〉

朝10時すぎ。『ごろごろどっしーん』(西内みなみ作，山内ふじ江絵，年少版こどものとも，福音館，1978，タテ21cmヨコ20cm) を私のところへ持って来て，読んでもらいたがる。リスの絵のところで，リスが雪の玉を両手であごのあたりにまで持ち上げている絵を見て，自分のほほを両手でさわるようなかっこうをして見せる。それから，大きく口をあけて私を見る。どうしたのだろうと思って絵をよく見ると，横向きになったリスが大きく口をあけて，雪のかたまりがころがりおちてくるのを見ているのである。こんなところまで見て真似をしていたのかと思うと，おかしくなる。雪のかたまりがころがり落ちてくるのを，あんぐりと口をあけて見ている動物たちが次々と出てくるのだが，M児は，ページをひらくたびにその動物たちを真似て，大きく口をあける。絵本の中の動物たちのかっこうを真似て見せ，それに対して，私が「ほんとだー。びっくりしてお口あけてるねー」と応じてやると，とてもうれしがる。

事例 8 〈昭和54.1.6（1歳6か月)〉

朝，ふとんの中で。「ご本読んであげよう。こっちへ来て，ごろんしなさい」と言うと，すぐに私のふとんの中に入って来て，あおむけに寝る。『こねこ』(岸田衿子，荻太郎絵，年少版こどものとも，福音館，1978，タテ21cmヨコ20cm)『ごろごろどっしーん』(前出)を見る。『こねこ』の表紙を見ただけで，「マンマ」と言う。絵本の中で子ねこが牛乳を飲んでいる絵を思い出したらしい。その絵のところにくると，「マンマ　マンマ」と言って指をさす。『ごろごろどっしーん』では，絵の中の動物たちのしぐさ（ほほに手をあてたり，口をあんぐりあけたり）を自分からして見せる。

事例 9 〈昭和54.1.7（1歳6か月)〉

京都の友人宅へ遊びに行く。朝11時ごろ，近鉄特急の中で，はじめのうちはずっと外を見ている。藪のそばを通りすぎた時，小さな声で「キ」と言う。それを聞きつけて，「あら，ほんと。木がたくさんあるね。木よ」と言うと，今度は大きな声で「キ」「キ」と，何度も言う。それからは，木を見つけると，「キ」と言って指さす。自動車が通っているのを指さして，「ブーブー」と言う。　外を見るのに飽きると，「マンマ，マンマ」と言っておやつを欲しがる。「マンマはあとでね。ご本読もうね」と言って，『とこちゃんはどこ』(前出) を出して一緒に見る。〈マンマ〉のことは忘れて，1ページ1ページ人込みのなかに紛れ込んでいる〈とこちゃん〉を指でおさえたり，私が尋ねる動物や人物を探して，それを指でおさえたりしながら京都まで行く。

事例10 〈昭和54.1.7（1歳6か月)〉

（夕方，京都から帰って来て）Eに学園前駅まで車で迎えに来てもらう。Eが「ミンミン（M児の愛称）どこへ行ってたの」と聞くと，「ブーブー，カーカー」(「電車に乗って，お母さんと行った」の意か) と答える。「おねえちゃんやおにいちゃんがいたね。赤ちゃんもいたね」と私が言うと，うなずく。Eが再び，「ミーちゃん，どこへ行ってたの」と聞くと，「ブーブー，ブーブー」と答え，しばらくして「キ，キ」と言う。「特急の窓から木が見えたことを言ってるのよ」と私がEに説明していると，また，「キ，キ，キ」と，念をおすように私の顔をのぞきこむ。

事例11 〈昭和54.1.8（1歳6か月)〉

午後。M児のために，自動車用の補助いすを買う。それを助手席に取りつけ，さっそくM児を乗せる。はじめて前の席に一人ですわったM児は，外が広々と見えるのでうれしいらしい。前を走る車を指さしては，「ブーブー，ブーブー」と言う。時々，後ろの座席の私を振り向いてニヤッと笑ったり，「バァー」と言ってからかったりする。車の外を見ていたM児は，時々「キ，キ」と言う。「ほんとだ，木があったね」と言ってやると，「キ」と言いながら，道路沿いの木を指でさす動作をする。

事例12 〈昭和54.1.8（1歳6か月)〉

夜。Eがカバンから『おはようミケット』(パトリス・アリスプ作・絵，こどものとも，福音館，1979，タテ26cmヨコ19cm)，『みのむし』(甲斐信枝作・絵，かがくのとも，福音館，1979，タテ23.5cmヨコ21cm)，『おおきいものは？』(山本忠敬作・絵，年少版こどものとも，福音館，1979，タテ21cmヨコ20cm) の3冊の絵本を出してM児に渡す。M児は，抱きかかえるようにして，どれから見ようかというかっこうをする。

Eが「これ，ミーちゃん，大好きでしょ」と言って，『みのむし』を見せると，表紙の木の絵を見て「キ」と言う。中をひらいて，M児のよく知っているみのむしの絵が出てくると,「ムイムイ！　ムイムイ！　ムイムイ！」（ムシの意）と，いささか興奮ぎみに，その絵を指先でせわしなくこするようにして言う。ページをめくって，木の絵が出てくるたびに「キ」と言う。（＊当時，M児は虫が好きで，とくにアパートの周りの木にぶらさっがている〈みのむし〉を見るのを喜んだ）

『おおきいものは？』は，表紙の女の子をさして，「ミンミン」と言い，男の子の絵を見て「アッウン」と言う。（＊あっくんの意。階下に住むM児の遊び友だちAくん。当時2歳3か月）ヒヨコの絵を見て「ピイピイ」と言う。アリの絵を見て，Eが「ありさん」と言うと，M児は「ムイムイ」と言う。ニワトリが出てくると「コッコ」，女の子が出てくると「ミンミン」，お母さんが出てくると「カーカ」，自動車の絵を見ると「ブーブー」など，知っている絵が出ると自分からその名を言う。ビルの絵も，画面いっぱいの山の絵も，だまって見ている。

3冊の絵本の中で『おはようミケット』をいちばん喜ぶ。1ページ目からたくさんのぬいぐるみ人形が出てくる。女の子やミケットという名のぬいぐるみの猫の絵を見て,「ミンミン　ミンミン」「ニャー」とか,「パッパッ」（馬のぬいぐるみ)「ムイムイ」「ポッポッポッー」(はと)など，少し興奮ぎみに，あちこち指でおさえながら言う。同じく『おはようミケット』の中で，すべり台の絵が出てくると，自分から「シュー」と言う。「すべり台ね。シューって，すべったね。ミンミンも」と私が言うと，また,「シュー」と言って指ですべり台の絵をなぞるようにする。今まで，公園のすべり台をすべらせる時,「シュー」と言ってすべらせていたのだが，それを思い出して，女の子がすべり台をすべっている絵を見て，自分から「シュー」と言ったのである。

事例13〈昭和54.1.9（1歳6か月)〉

8時ごろ起きる。おまるにこしかけて『おはようミケット』の絵本が目につくと,「ニャーニャー」と言って取って欲しがる。おまるにすわったまま，ひととおり，自分でページをめくって見る。「ミンミン」「ニャー」「ワンワン」「ブーブー」「カーカ」（お母さんの意）「ターチャン」（お父さんの意)など，絵を見ながら言う。パン屋さんの絵で,「ミーちゃん，これなあに」と聞くと，黙っている。「パンよ。パン」と言うと,「パン」と真似る。

事例14〈昭和54.1.10（1歳6か月)〉

朝食の時，茶碗の中に顔をつっこんでごはんを食べようとする。Eが「ミンミンはどういう食べ方をしてるんだ」と言うと，顔をあげて「ニャーン」と言う。『こねこ』（前出）の絵本の中で，こねこが茶碗に顔を半分つっこんで食事をしている絵があったことを，私はすぐ思い出しておかしくなった。どうやらその絵の真似をしている様子である。「ミーちゃん，ニャンコがそうして食べていたの？」と，顔を茶碗の中につっこんだままのM児に声をかけると,「ニャーン」と，うれしそうな声をあげる。

事例15〈昭和54.1.10（1歳6か月)〉

朝食後，Eが書斎にひっこんでしまうと，Eのあとを追って書斎に入って行く。はじめ『とこちゃんはどこ』（前出）を持って行き，ちゃんとこたつに足を入れて，一人で見ていたが，すぐにEにさしだして，読んでもらいたがる。Eが相手になってやると，次々と,『くまちゃんのいちねん』(前出)『おはようミケット』(前出)『げんきなおにたろう』(板坂寿一作・絵，福音館，1970，タテ14.5cmヨコ19cm）を持って行っては，読んでもらおうとする。書斎に入る時,「ターチャン　ターチャン」（おとうちゃんの意）とやさしい声を出しながら，Eに顔を見せないように，うつむいて入って来るそうだ。顔が合って,「あとで」とか「あっちへ行っててね」と言われるといけないので，顔を合わせないようにしているのかなと言って，Eが笑う。

事例16〈昭和54.1.11（1歳6か月)〉

2時すぎ。私がノートに記録しているそばで，小さな木製のくりぬきの動物や自動車，人形などのおもちゃを出して遊んでいる。自分の食べているビスケットを，犬の口もとにもっていき，自分の口もとをパクパクさせ,「パッパッパッパッ」(唇を合わせてならす)と食べさせる真似をする。「ワンワン，なにしてるの？」と聞くと,「マンマ」と答える。

事例17〈昭和54.1.12（1歳6か月)〉

朝9時ごろ。「ターチャン　ターチャン」と言いながら，Eの書斎に入って行き，原稿を書いていたEの膝にすわろうとする。Eが「本をもっておいで」と言うと，自分の絵本が置いてある台所の本箱に走って来て，すわりこんで自分の好きな絵本を探す。まず,「ムイムイ　ムイムイ」と言いながら,『ななほしてんとうむし』(手元にないので不明。おそらく，福音館の「かがくのとも」だと思われる）を持って行く。Eの膝にすわって一緒に見ている。見終わると，また，走って来て，今度は『くまちゃんのいちにち』(かこさとし文と絵，福音館，1970，タテ15cmヨコ15cm)を持って,「シュッ　シュッ　シュッー」と言いながら走っていく。この絵本の中でくまちゃんが水鉄砲をしているところを思い浮かべて,「シュッ　シュッ　シュッー」と言っているのである。今まで読んだ絵

本の場合，どんな絵や場面が出てくるかというのを，M児はだいたい知っているらしい。その他，『とこちゃんはどこ』（前出）や『おはようミケット』（前出）『こねこ』（前出）など，次々にEの所に持って行く。

事例18〈昭和54.1.12（1歳6か月）〉

午後。『おはようミケット』（前出）の中の母親に抱かれている赤ん坊の絵を指でおさえて，「カックン」と言う。よほど気に入ったらしく，何度も自分でそのページを出しては「カックン」と言う。ドライブのとき，車の窓から，小さい男の子が手をひかれて歩いているのを見ても「カックン」と言う。目下，「カックン」は小さな男の子の代名詞のような役目をしている。（＊カックンは，もともと，同じアパートの1階に住む男の子K君のこと。M児と同年齢だが体つきが小さいので，M児は，自分よりも年下の赤ちゃんだと思っていたようである。）

事例19〈昭和54.1.12（1歳6か月）〉

夜。『くまちゃんのいちにち』（前出）を見ていて，自動車が出てくると，それを指でなでるようにしながら，「ターチャン　ターチャン」と言う。「そう，おとうちゃんと，ブッブーに乗ったのね」と言うと，うなずき，今度は，「カーカ　カーカ」（お母さんの意）と言う。「カーカも乗ったね」と答えると，「ミンミン」と言う。3人で車に乗ったということを言いたいらしい。

『くまちゃんのいちにち』の表紙が，はずれそうになる。もう何度も何度もノリではったり，セロテープでとめたりしてあったのだが，今度は背表紙のノリがとれて，バラバラになりそうである。こんなにボロボロになるまで読まれれば絵本も本望と思えるほどである。『くまちゃんのいちにち』だけでなく，『くまちゃんのいちねん』（前出）もセロテープだらけでボロボロだし，『くまちゃんのごあいさつ』（かこさとし文と絵，福音館，1972，タテ15cmヨコ15cm）は，ずっと以前に破れてバラバラになって，しまいこんだままである。M児は，これらの絵本でいろいろなものの名前を覚えたし，外で見聞きしたものを，もう一度この絵本に出てくる絵とてらしあわせて，頭の中に定着させていったのである。まさに，最初の愛読書といってよいだろう。

事例20〈昭和54.1.13（1歳6か月）〉

出勤前のEが，こたつで本を読んでいると，自分の絵本を次々と持って行く。まず『おはようミケット』（前出）を「カックン　カックン」と言いながら持って行き，Eの膝にすわって，大急ぎでカックンの出てくるページをさがす。赤ちゃんを抱いている女の人の出てくるページを開くと，その絵をたたくようにして，「カックン　カックン」と，Eに向かって言う。『ともこのあさごはん』（ニタ・ソウター原作，ばんどうゆみこ文，岡部りか絵，年少版こどものとも，福音館，1978，タテ21cmヨコ20cm）を持って行く時は，台所にいる私に，その絵本をもったまま，両手を突き出したりひっこめたりして，「ゴロンタ音頭」を踊って見せる（＊NHKテレビの「おかあさんといっしょ」に出てくる人気者ゴロンタの踊り）。M児は，『ともこのあさごはん』に出てくるトラのぬいぐるみをゴロンタにみたてていて，ゴロンタの踊りを踊って見せることによって，「この絵本には，ゴロンタが出てくるよ」と私に伝えているのである。私が「そのご本には，ゴロンタが出てくるね。いいね。はやくお父さんに読んでもらいなさい」と言うと，「キャー」と歓声をあげてEのもとへ走って行く。しばらくして，Eの部屋から，M児の「イヤイヤー」という声が聞こえる。まっくろこげのトーストを前にして，〈ともこ〉が悲しそうな顔をしているページを見ているのだなとわかる。私が，「ともこちゃんが，イヤイヤって言っているのよ」と説明したのを覚えていて，M児は，その絵を見ると「イヤイヤー」と言うのが常である。

事例21〈昭和54.1.17（1歳6か月）〉

夜。Eのところへ『ななほしてんとうむし』（前出）を持って来て，すぐに腹ばいになって読んでもらおうとする。Eと1ページ1ページ「ムイムイ，ムイムイ」などと言いながら見ていたが，クモ（蜘蛛）の絵が出てきたので，私が，「ミーちゃん，これ，クモよ。おぼえてる？いたねえ」と言うと，さっと半身をおこして，窓を指さす。夏のあいだ，窓の外に巣をかけていたクモを，よく一緒に見ていたのであるが，「クモ」という言葉も，クモの巣のこともちゃんと覚えていた。Eは「よく覚えていたね」と感心。M児は，立ちあがって窓をあけに行く。外には何もないので「クモさんはいないね。バイバイして行っちゃったね」と言うと，外に向かって「バイバイ」と言う。

1歳6か月における絵本享受の実態と考察

①この時期までに，M児にとっては，絵本を見たり読んでもらったりすることは，日常生活の一部となっていて，〈事例1〉〈事例9〉のように，ちょっと長い外出や旅行に行く時は，必ず絵本を持参し，車の中や，電車の車中で読み聞かせた。〈事例9〉のように，車中でおやつをほしがっても，絵本を出すとそちらの方に夢中になるというようなこともしばしばで，絵本にすっかりなじむことができていた。〈事例19〉では，1歳前期でよく見ていた『くまちゃんのいちにち』『……いちねん』『……ご

あいさつ』の3冊がボロボロになって，〈最初の愛読書〉という記述がみられる。1歳児・前半期において，M児は，絵本に対して「絵本のなかには自分の知っているものが描かれているから，絵本を見たり読んでもらうのは楽しい」ということを十分体験してきており，1歳6か月では，〈愛読書〉と言える絵本もできるほど，さらに絵本への愛着を深めていった。

②〈事例2〉〈事例4〉には，すでに絵本の中ではよく知っているニワトリやウマやペンギンを初めて見て，大変興味を示した様子が記されている。「コッコ」とか「パッパ」とか声をかけながら近づいて行こうとしたのも，これまでの絵本体験をとおして親近感をもてたからかもしれない。とくに〈事例4〉では，ペンギンが糞をする瞬間を見て，自分から「シッコ」と言い，それが強烈な印象になったらしく，それからしばらくの間，ペンギンと言えば必ずシッコと言うようになった。ペンギン＝シッコという結びつきによって，M児の中で，ペンギンにまつわる〈話題〉が生まれたのである。強烈な印象を伴う体験とそのイメージ化,そしてそれを言葉で表すこと，この三つが一緒になった時，1歳半の幼い子どもでも，大人から教えこまれたものではない自分のなりの〈話題〉をもつことができたのであった。その後も，M児は『とこちゃんはどこ』でペンギンの絵が出てくるたびに，うれしそうに「シッコ」と私に告げた。繰り返し見ることができる絵本をとおして，M児はその〈話題〉をしばしば私たちに投げかけ，言葉を交わしあうことを楽しむことができたのである。〈話題〉の強化と，言葉を交わしあう喜びの増加ということを，乳幼児期における絵本の果たす大きな役割の一つとして指摘できる。

③〈事例3〉は，家にテレビのないM児の，テレビで幼児番組を見た時の反応である。画面に釘づけになり，言葉も出なければ身体も動かないという状態であった。その後も，M児は，両親の実家や近所の友だちの家でテレビを見ることがあったが，同じよう状態で画面に見入っていた。しかし，絵本を見る時のような盛んな発話は見られなかった。ただ，内容はしっかり覚えていて，「おかあさんといっしょ」の人気者ゴロンタが大好きになり，その後〈事例20〉のように，絵本に出てくるトラの縫いぐるみをゴロンタに見立てたり，ゴロンタ音頭を踊るようになった。わずかの事例で結論を出すことはできないが，この時期の子どもにとってテレビは，次々と変わる画面の内容を受けとめるのに精一杯，あとでそのとおりに真似てみるといった，かなり受動的な見方になってしまうように思われた。絵本に対して能動的にかかわれるようになっているM児の，テレビの前では言葉も行動も停止してしまったような姿が印象的であった。

④〈事例5〉は，この時期，知らない男の人に対してはげしく人見知りをしていたM児が，絵本を介して心を開いていった様子が記されている。

⑤〈事例6〉〈事例9〉〈事例10〉〈事例11〉をとおして読むと，M児が，「木」という言葉を覚え，それを使いこなせるようになっていく過程がよくわる。

一般に2歳ちかくなると，子どもは「ナニ？　ナニ？」と言ってしつこく物の名前を尋ねるようになり，急速に言葉の数がふえてくる。M児の育児記録を見ていると，まだ「ナニ？」という言葉が言えないそれ以前の段階から，指をさすなどの動作や「ウン？」といった呼びかけによって，自分の知りたいものに対して何か言ってもらいたという要求が出てきた。〈事例6〉も，M児からの要求に応えて「キ（木)」という言葉を教えたのであるが，一度「キ」と言えると，あとは自分で何度も反復して「キ」と言う。いい機会だと思って，絵本の中のいろいろな形の木をいくつか見せて教えると，自分も「キ」「キ」と言いながら熱心に見る。

おもちゃや絵本の絵などから，M児の中で木というものがどの程度まで概念化されたか知るよしもなかったが，4日後(〈事例9〉)，M児は車窓から本物の木を見て小さな声で自分から「キ」と言った。自信なさそうな声であったが，それが木であることを私が認めると，今度は大声で繰り返し「キ！」「キ！」と言って喜んだ。絵本をとおしてほぼ「木」がどんなものか概念化できていたことがわかる。そして，実物を見て「キ」と言えた時，それは，一つのことばが完全に獲得された瞬間であった。

⑥この期に入って新たに注目されるのは，〈事例7〉に見られるように，自分の力で絵をかなり細部まで読みとり，そこに描かれている〈行為〉に興味をもち，それを模倣するようになったことである。すでに1歳前半期から，絵本に描かれている〈物〉と実物とを照合することには興味をもっていた。たとえば，サルの絵が出てくるとサルの縫いぐるみを取って来てつきあわせるといった具合である。このような絵と実物を照合する行動は，次の1歳7か月の〈事例23〉〈事例25〉に見られるように，1歳児・後半期でもよく見られたが，それに加えて，絵本の中の〈行為〉に興味をもちそれを模倣するようになった。〈事例7〉は，そのことがはっきりとわかった事例である。〈事例14〉では，絵本の中の子ねこの食べ方を真似て，実際の食事の時に茶碗に顔をつっこんでごはんを食べようとした。〈事例19〉でも，絵本の自動車の絵そのものに対してよりも，自動車に乗るという〈行為〉の方に興味がむいているのがわかる。「照合」も「模倣」も，

描かれている内容を確かめ把握する行為である。しかしそれはつねに，そばにいる父親や母親の注意をひくかたちで行われた。つまり，「この縫いぐるみのサルも絵本のサルと同じだね」(照合)，「ネコがこんなふうにごはん食べてたね」(模倣)と，自分が読みとった内容を私たちに伝えようとする行為でもあった。それに対する私たちの感心したりほめたりする反応が，M児にはうれしいらしく，〈事例８〉に見られるように，この時期の絵本の楽しみ方の一つになっていった。

⑦やがてそれは，絵本の中の主人公の行為を模倣して遊ぶ「ごっこ遊び」へと発展していくように思われる。たとえばM児は，３，４歳のころ，『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウン絵，せたていじ訳，福音館，1965，タテ26cmヨコ21cm) や『さんまいのおふだ』(水沢謙一再話，梶山俊夫絵，こどものとも，福音館，1978，タテ26cmヨコ19cm)などのごっこ遊びに夢中になったが，その始まりは，絵本の中の〈行為〉を模倣し楽しみ始めたこの時期にあると見てよいであろう。このことは，この時期に〈事例16〉のような単純なごっこ遊びができるようになっていることからも指摘できる。このような「ごっこ遊び」は，成長するにつれて，ますます盛んになっていった。１歳８か月の〈事例49〉では，いつもやってくる豆腐屋さんの真似をし，それを買いに出る私の真似までするようになった。絵本の中からでも，日常生活の中からでも，「ごっこ遊び」は生みだされていった。

⑧〈事例12〉では，初めて手にする絵本に対するM児の反応が詳しく記されている。１歳児・前半期では，初めての絵本の場合，まず私に読んでもらいたがった。しかし，この時は，渡された３冊の絵本を抱きかかえ，１冊１冊自分でページをくって，自分の知っているものが出てくるとその絵を指さして，そばで一緒に見ている私たちに，自分の言葉で伝えようとしたのである。

『みのむし』の場合，当時覚えたばかりの「木」は出てくるし，大好きなみのむしは出てくるし，ページをめくるたびに興奮したM児の口から，「キ」とか「ムイムイ！」とかいう言葉がとびだしてきた。絵本の中に自分のよく知っているものや，興味をもっているものがのっていることを喜び，それを言葉で父親や母親に伝えることができることに喜びを感じていることがわかる。それは他の２冊の場合も同様である。生活体験がひろがってきたこと，言葉の数が増えてきたこと，周囲のものへの興味関心が増してきたこと，この様な成長に支えられて，M児の絵本との関わりは，幼いなりにも，主体的，能動的，感動的なものになってきている。

⑨もう一点，〈事例12〉で私が驚いたのは，『おはようミケット』のすべり台の絵を見て，M児が自分から「シュー」と言ったことである。この事例は１月８日のもので，前の年の秋，M児は公園ですべり台も体験し，私の「シュー」という言葉かけもよく聞いていたが，まだ「シュー」とは言わなかった。冬になってからはすべり台をしていないので，秋のすべり台体験からは２，３か月の空白があるにもかかわらず，すべり台の絵を見ると，「シュー」という言葉が出てきたのである。「シュー」という私の言葉かけもふくめて，すべり台体験をしっかりと記憶にとどめていたことがわかる。そしてその体験が，絵本との出会いをとおして思い起こされ，その時はまだ言えなかった「シュー」という言葉まで出てきたのである。この時期の子どもが，体験や周囲の人たちの言葉かけをとおしてどれだけ多くのことを吸収し，自分のものにしていくのか，言葉をどのように獲得していくのか，その一端に触れることができた事例である。なお，同じようなことが，〈事例21〉でも観察されている。１歳前後のころ，絵本で見たり実物を見たりして興味をもっていたクモ（蜘蛛）のことを，半年たってもよく覚えていた。

これらの事例から，まだ何もわからないような１歳前後の子どもでも，身近な体験や豊かな言葉かけをとおして実にたくさんのことを吸収し，記憶して，それがやがて「行動」や「言葉」となって現われてくるのだということがわかる。そしてこの時期に絵本を与えるということは，子どもが体験や言葉やイメージを獲得し，定着させ，拡大していく上で，大いに役に立つことがわかる。

⑩この時期になってM児は，親と一緒に絵本を見るのがますます好きになっていった。夜寝る前は，布団の中で私が読んでやることが多かったが，昼間，私が家事で手の取れない時，父親が家にいれば，必ず絵本を持って父親の書斎に行くようになった（事例15，17，20，21。１歳７か月の事例25，30，39，43，45。１歳８か月の事例50)。M児は，読んでもらいたい絵本を自分で選んで持って行くのであるが，たいてい自分がその内容をよく知っている絵本が選ばれていた。そして，父親の部屋に行く途中，「シュッ，シュッ，シュー」とか「カックン，カックン」など，手にしている絵本の内容と関連のある言葉を口にしながら持って行った。また，絵本を見ている時もM児の発話が多くみられた。このことからも明らかなように，M児は，父親と一緒に自分の好きな絵本を見て楽しみたい，自分の知っていることを自分からも父親に伝えたいという気持ちが強かったと思われる。何を読んでもらいたいか，その絵本のどこが気に入っているのか，その絵本を見ながら父親に何を伝えたいのか，そう

いう，主体的に絵本とかかわる力が，すでにこの時期から育ち始めることがわかる。

⑪主体的に絵本とかかわるになったもう一つの特徴として，絵を自分なりに解釈して，それを自分の言葉で説明し始めたことが指摘できる。M児は，1歳5か月に入って，絵本の中の女の子や両親を，それがクマなどの動物の絵であっても，「ミンミン」(自分)「ターチャン」(父親)「カーカ」(母親）などと，自分や自分の両親に置き換えて読むようになった。この傾向は，1歳児・後半期に入るとさらに強まった。〈事例18〉に見られるように，『おはようミケット』の中の母親に抱かれている赤ん坊の絵を見て，「カックン」と言うようになった。その絵は，市場の中のケーキ屋の前にたたずむ子どもを抱いた女の人の絵で，物語の展開とは関係のない点景人物である。M児は，抱かれている子どもを，自分のよく知っている「カックン」(K君)に見立てたのであるが，実際，K君は，当時母親に抱かれていることが多かった。M児は，自分の日常生活で見聞きしたことに照らし合わせて絵本の絵を読みとることをし始めたのである。その後しばらくM児は，絵本の中に「カックン」を見つけたことに夢中になり，『おはようミケット』を見る時は必ず「カックン」と言って，そのページを開いて私たちに見せたり説明するようになった。(事例18，20。1歳7か月の事例39を参照）また，他の絵本でも，小さな男の子が出てくると，「カックン」だと言うようになった。(1歳7か月の事例30，36，40，46を参照。)

1歳7か月

事例22〈昭和54.1.28（1歳7か月)〉

8時前に目をさます。「チュッチュー」と牛乳を欲しがる。枕元の梅原猛著『隠された十字架』(新潮社　1972)を見つけて指さし，「マンマ」と言う。昨夜，この本の口絵の仏像写真を見て，さかんに「マンマ」(仏さま…マンマンさんの意）と言っていたが，今朝もその写真のことを思い出したようである。私が「よく覚えていたね。ほら，マンマンさんがいたよ」と言って口絵の写真を見せると，M児はちょっと両手を合わせて拝むかっこうをして見せる。「カーカ　カーカ」(お母さんの意）と言いながら，本を私におしつけるようにする。お母さんの本だと言っているのである。私が「はい，ありがとう。カーカのご本ね。ミンミンのご本は？」と言うと，立ち上がって絵本を取りに行く。「ニャーン　ニャーン」と言って，『こねこ』(前出）を持って来る。「カーカ」と言って絵本を私に渡し，ふとんの中にもぐりこんで来て，私の腕を枕に上を向いて，絵本を読んでもらいたがる。テレビの上で寝ているネコの絵を見ながら，「ねこさん，何してるの？」と聞くと，「ネンネー」と言う。「あっ，ねこさん，何か見つけた。何かな？」と聞くと，「チョーチョ」(蝶の意)と言う。「そー。ちょうちょさんですね。ひらひらひらって飛んでるのよ」と言って聞かせる。M児は最後のページの親ねこと子ねこがよりそっている絵をさして，「カーカ，ミンミン」と言う。

事例23〈昭和54.1.29（1歳7か月)〉

最近，またブルーナの絵本(BRUNA BOOKS 全30冊，Dick Bruna作・絵，METHUEN社）をおもしろがるようになって，本棚の高い所に並べてあるのを指さして取ってもらいたがる。それで今，M児の絵本置き場に，『The Egg』(1964)，『Miffy Goes Flying』(1971)，『Miffy at the zoo』(1965)，『The litlle bird』(1962)，『Circus』(1963)などを出してやっている。(＊このブルーナー絵本は，英語版。日本語版は「うさこちゃんシリーズ」として福音館から出版されている。)

夜。『Miffy at the zoo』を出して来て，「シュッシュー，ポッポー」と言いながら表紙を見ている。表紙にはMiffy ちゃん（うさこちゃん）が立っているだけなのだが，この絵本の中で，Miffyちゃんが電車に乗って動物園に行くのを知っていて，本を開く前からその場面をイメージしながらそう言う。私にページをめくらせながら，ゾウの絵が出てくるとゾウのぬいぐるみを取りに行き，「ショーシャン」と言って私に見せる。「ぞうさん」とゆっくり言って聞かせるが，「ショーシャン」になる。シマウマの絵が出てくると，「パッパ」と言いながら，ちいさなウマのぬいぐるみを，サルが出てくると，「キャッキャッ」と言いながら木製のサルの人形を持って来る。

事例24〈昭和54.1.30（1歳7か月)〉

朝。自分でイスを持って来てその上にあがり，私が流し台で食事の支度をしているのを見ていた時，Eがふすまを開けて書斎から出て来る物音を聞きつけて（台所からはEの姿は見えない)，私に「トーチャン」と言う。トイレの戸の開閉する音を聞いて「シッコ」と告げる。そのあと，Eが洗面所で顔を洗っている音がしはじめると，「ブンブン」と言いながら，顔を洗う真似をする。最近，家の中の物音を聞いただけで，誰が何をしているのかわかってきた。

事例25〈昭和54.1.30（1歳7か月)〉

午前中。書斎にいるEの所に『Miffy at the zoo』(前出）を持って行って読んでもらう。ページを開く度に，そこに描かれている動物と同じ動物のぬいぐるみやおもちゃを，いちいち取りに行き，ゾウやウマなどのぬいぐ

るみをEの所に持って行く。サルの絵を見て，「キャッキャッ」と言いながら，木製のサルの人形を取りに行くが，「ナーイ　ナーイ」と言いながらもどって来る。「ニャーイ，ニャーイ」のようにも聞こえる。はじめは何と言っているのかわからなかった。Eが「Mは『ない』と言ってる」と言うので，もう一度「ミーちゃん，おさるさんは？」と聞くと，「ナーイ　ナーイ」と言う。「ナイ」（無いの意）という言葉が出たのは初めて。今までに「ナイ」という言葉を意識的に教えたことはなかった。考えてみれば子どもが耳にする言葉の中でも頻度の高い言葉である。それを今，必要に迫られるような状況の中で自ら使い始めたのである。

見つからなかったサルの人形はあきらめて，『Miffy at the zoo』を見ていたが，カメの絵が出てくると，木彫りのカメを探しに行く。おもちゃ箱の中を「ナーイ　ナーイ」と言いながら探していたが，見つかると「タァー！」（アッターの意）と言う。

事例26〈昭和54.2.1（1歳7か月）〉

午前中。『おはようミケット』（前出）の，女の子が両親と大きく開いた窓のそばで夕食を食べている絵を見ていて，M児は自分の喉にさわって「ナーイ」と言う。喉にさわるしぐさは月を意味するので，つまりM児は，「この絵にはお月さまがいない」と私に言ったのである。（＊月は「ノンノンさん」，喉をそらせることを「ノンノする」と教えていたのであるが，まだ「ノンノン（月）」と言えないM児は，月のことを言いたい時は，喉をそらせてさわるしぐさをしていたのである）次のページを開くと，窓の外にはちゃんと月がかかっている。同じような場面なのに前のページには月がなく次のページには月が出ていることに自分で気がついて，そのことについて私が何も言わないので，月を示す身振りと「ナーイ」という言葉とを合体させて，私にそのことを教えたのである。

事例27〈昭和54.2.2（1歳7か月）〉

午前中。『おはようミケット』を持って来る。女の子がおもちゃ屋の前にいるページを開くと，「タァサ」と言う。「何？　タサって何？」と聞き返すと，ちょっと力を入れて「タァサ！」と言う。絵本をM児の方に出して，「タァサって何？　どこにあるの？」と聞くと，折りたたんだおもちゃの傘がぶらさがっている絵をさして，その上をなでるようにする。「これ？　ああ，カサね。カ・サよ」と言うと，「タサ」と言う。「カって言ってごらん」と言うと「カ」，「サって言ってごらん」と言うと「サ」，「カサって言ってごらん」と言うと「タサ」と言う。M児は，傘には前から関心をもっていて，Eの傘を書斎に持ち込んでは，開いたり閉じたりしてもらって喜んでいた。「カサ」という言葉はよく聞き知っているが，まだ自分から「カサ」と言ったことはない。今日は，絵本の中にカサを見つけて，それを私に知らせたくて，初めて自分から「タァサ」と言ったのである。

事例28〈昭和54.2.2（1歳7か月）〉

10時すぎ。散歩をかねて買い物に出る。次の角を曲がるとネコがいつも日向ぼっこしているという所まで来ると，「ニャーン　ニャーン」と言いながら歩いて行く。角を曲りいつもの所まで来て，あたりを見まわし，「ナーイ　ナーイ」と言う。「ニャーンいないね」と言うと，もう一度「ナーイ」と言って，キョロキョロとネコの姿を探している。

事例29〈昭和54.2.3（1歳7か月）〉

午前中。Eの書斎で『あな』（谷川俊太郎作，和田誠絵，こどものとも，福音館，1976，タテ19cm26cm）を見つけて離さない。Eは仕事中なので，私が部屋から連れて出ると，出たところの板の間にすわりこんで，めくって見はじめる。「おかあちゃんと一緒に読もうね」と言うと，やっと腰をあげてついて来る。表紙のチョウチョウの絵を見て，「チョーチョ」と言う。主人公の男の子がスコップをもって立っているのを見て「タッチ　タッチ」（立っているの意）と言う。私がその子をさして「これ，だれ」と聞くと，「カックン」と言う。お母さんがあなの中をのぞいている絵を見て「カーカ」，妹の絵を見て「ミンミン」，男の子の友だちの絵は黙って見ている。お父さんの絵を見て「トーチャン」と言い，お父さんが火のついたタバコを持っているのを見て，「スー」と言って，指を口にあてて，タバコを吸う真似をして見せる。イモムシの絵を見て，少し興奮気味に「ムイムイ，ムイムイ！」と言う。

この絵本は，描かれているものがすべてM児の知っているものばかりで，絵もイラスト風の単純なタッチで描かれており，M児はすっかりこの絵本に親しみをもったようである。私に読んでもらうよりも先に，自分でページをめくっては，出てくる人物や虫などを指さして，自分で私に告げる。今日一日，『あな』を3，4回一緒に読む。

夕方，オマルにすわったまま，『あな』を見ている。あなを掘っている男の子の顔に汗が1つぶ出ているのに気づき，それを私に示し，自分の顔にさわる。「これ，汗よ。暑い暑いって，言ってるのよ」と言うと，「アチイ　アチイ」と言う。ページをめくるたびに，その汗はたくさん出てくるので，M児は，自分の顔をさすったり，男の子の顔をさすったりしながら見ている。

事例30〈昭和54.2.4（1歳7か月）〉

午前中。『あな』をEの書斎に持って行き，抱いてもら

って見ている。出てくる人物を指さしては「カックン」とか「カーカ」「ミンミン」「トーチャン」と，大声で言う。

事例31〈昭和54.2.4（1歳7か月)〉

（事例30に続く場面）Eの書斎から出て来ると，『とこちゃんはどこ』(前出)を出して来て，私のそばにすわって見ていたが，デパートの中の場面で，〈ことちゃん〉がどこにも描かれていないページまでくると，「ナーイ　ナーイ」と言って，私の手をひっぱる。「ほんと！　とこちゃん，いないね」と言うと，指をあちこち動かして〈とこちゃん〉をさがすようなかっこうをしながら，「ナーイナーイ」と言う。

事例32〈昭和54.2.4（1歳7か月)〉

午後。ブルーナの絵本『Circus』(前出)を見ている時，ラッパをふいている楽人たちの絵が出てくると，「プップップッー，プップップッー」と言いながら，体をゆすって見せる。私が黙っていると，「カーカ」と声をかけて，私の顔を見ながら，「プップップー」と言う。「ほんとだ。プップップーしてるね」と答えると，コクンとうなずいて，またうれしそうに「プップップー」と言う。ゾウの絵が出てくると「ゾーシャン」，ライオンの絵が出てくると「ウォー」と言う。ゾウは今まで「ショーシャン」だったのが，今日は「ゾーシャン」と言う。今のところ，まだ「ショーシャン」「ゾーシャン」「ジョーシャン」と，発音が揺れている。

事例33〈昭和54.2.6（1歳7か月)〉

夜。『ぞうさん』(まど・みちお詩，中川李枝子選，中川宗弥絵，年少版こどものとも，福音館，1979，タテ21cm20cm）を持って来て，私のふとんの中に入りこんで，読んでもらいたがる。ゾウの絵が出てくると「ジョーシャン」，石鹸の絵が出てくると「エッシ　エッシ」と言いながら足をこすって見せる。身振りで，「これはからだを洗う石鹸だね」と言っているのである。手の絵が出ると自分の手をひろげて見せる。「テテよ」と言って聞かせると，「テテ」と真似て言う。鼻をかんでいる絵を見て「フン！」と鼻ならす。屑入れの絵を見て手でごみをすてるまねをし，「ポイ」と言う。ごはんを食べている絵を見て「マンマ」，うがいをしている絵を見て「ガァー」と喉をならす。握手をしている絵を見て私の手をにぎり「アーシュ」と言う。今まで何度もこの場面を読んでやる時，「はい，あくしゅ」と言って読ん聞かせているので覚えていたらしい。自分から言ったのは初めて。時計の絵が出てくると，隣りの部屋の柱時計を指さし，「チッター，チッター」(時計……チックタックの意）と言う。

事例34〈昭和54.2.10　(1歳7か月)〉

ブルーナ絵本『Miffy's Birthday』(1971）を持って来て，一緒に見てもらいたがる。表紙のMiffy ちゃんを指さして，「ミンミン」と言い，自分の胸をポンポンとたたく。「Miffy ちゃんのおべべ，きれいね」と言うと，自分の服をひっぱるようにして，「ミンミン」と言う。誕生プレゼントのハサミ，エンピツ，フエの絵が描かれているページでは，エンピツをさして「ジージ」と言い，そして「カーカ　カーカ」と言いながら，私の手をひっぱって，テーブルのところへ連れて行き，私の鉛筆立てからハサミを取ってもらいたがる。

事例35〈昭和54.2.11　(1歳7か月)〉

午後。かな子ちゃん（＊同じアパートの隣りの階に住む女の子。当時5歳。妹ののり子ちゃん（3歳）と一緒によく遊びに来た。M児は遊びに来る子どもたちの中でかな子ちゃんをいちばん慕っていて，かな子ちゃんのすることをよく真似した）が『みのむし』(前出）を見ながら，「ミー，ノー，ムー，シー」というふうに，一字一字区切りながら，ゆっくりと拾い読みをする。M児は，そばにすわって，一緒に絵本をのぞいたり，かな子ちゃんの真似をして「ミー」「ノー」などと言っている。

夜。『おはようミケット』(前出）の絵本をひろげて見ながら，「ア，タ，ウ……」などと，昼間かな子ちゃんが拾い読みをしていたのを思い出して，口からでまかせに，1音1音ゆっくり区切りながら声を出している。

事例36〈昭和54.2.12（1歳7か月)〉

午前中。Eの書斎から『へのへのもへじ』(高梨章作，林明子絵，年少版こどものとも，福音館，1978，タテ21cmヨコ20cm）を持って来て，私のそばにすわりこんで見る。小さな男の子の一日の生活が描かれている絵本で，M児にもよくわかり親しみのもてる内容である。1ページ1ページ自分でめくりながら，「カックン」(男の子の意)，「トーチャン」，「ミンミン」，「パッパ」(父親がタバコを吸っている絵を見て)，「カーカ」，「ブブー」(掃除機をかけてる絵を見て)，「タイタイ」(魚の意)などと，知っているものの名前を言いながら，私に語りかける。そのたびに私は，「ほんとだ。ミーちゃんよく知っているね」とか「おとうさんがパッパ吸ってるね。ミーちゃんのおとうさんとおなじだね」などと受けこたえ，そのページの内容を簡単に説明して聞かせる。今日一日，何回もこの絵本を取り出して見ていた。

事例37〈昭和54.2.14（1歳7か月)〉

午前中。玄関に置いてある絵本や児童文学の本棚の前に行って，『ちびくろさんぼ』(ヘレン・バンナーマン作，光吉夏弥訳，フランク・ドビアス絵，岩波書店，1953，タテ20.5cmヨコ16.5cm）と『三びきのこぶた』(石井桃子

訳，太田大八絵，福音館，19781，タテ21cmヨコ19cm)の背表紙を指さして出してもらいたがる。『ちびくろさんぼ』は，以前，遊びに来た子どもたちがよく出して見ていた絵本だし，『三びきのこぶた』は，M児が前によく見ていた絵本である。どちらも6ミリ幅の薄い背表紙なのに，自分が見たい本だとわかるのだろうかと不思議に思う。『三びきのこぶた』を渡すと，「オアヨー，オアヨー」と言いながら急いで居間へ行ってすわりこむ。最近M児は，「チックタック，チックタック，ボーンボン。おはよう，おはよう，夜が明けた。きれいな朝だよとびおきろ。時計が鳴ってる呼んでいる」という歌が好きで，自分でも「チッター，チッター，ボーンボン。オアヨーオアヨー，……ター」(〈ヨガアケ〉のところはまだ言えない）と歌えるようになって，毎日のようにこの歌を私と歌いたがる。今，絵本を開く前からこの歌の一節「オアヨー，オアヨー」を口ずさんでいるということは，『三びきのこぶた』の中に出てくる柱時計の絵を覚えていてそれを思い出しているのだと，私もすぐに察しがつく。思ったとおり，M児は急いで柱時計の絵があるページを開いて，指でさしながら，「チッター，チッター，ボーンボン」と言って私を見る。「ほんとだ！　ミーちゃんよくおぼえていたね」とほめると，得意そうな顔で，「チッター，チッター，ボーンボン」とくりかえす。『ちびくろさんぼ』は，黙って，ペラペラとページをめくって見ている。

事例38〈昭和54.2.16（1歳7か月)〉

夜。私が「ミーちゃん，おはなししてあげよう」と言って，次のように言う。「ミンミンと，おとうちゃんと，おかあちゃんと，いっしょに，車にのって，ドライブしました」。最近このようなごくごく短い作り話をよくしてやる。たとえば「むかしむかし，ミンミンがいました。ミンミンは，おとうちゃんが大好きでした」といった調子で。M児は，このように話しかけてもらうのが好きで，おしめをかえる時などいつもはじっとしていないのだが，「おはなし」をすると，おとなしくして聞いている。

今夜は，2回ほど同じ調子で「ミンミンと，おとうちゃんと，おかあちゃんと，いっしょに，車にのって，ドライブしました」と，ゆっくり話し聞かせると，3度目から自分も一緒になって，「ミンミントー，トーチャントー，カーカートー」と言いだす。「トー」のところに力をこめて言い，ふざけたような表情をする。最後の「…しました」のところは，同時か，私より少し早めに「タァー」と大声で言って笑う。「ミーちゃん，もうネンネしようよ。トントン（ふとんの意）へ行って，ねよう」と，手をひっぱると，自分から「カーカートー」（お母さんとの意）と言う。初めて自分から助詞の「ト」を使うことができた。

事例39〈昭和54.2.19　（1歳7か月)〉

夜。EがM児のふとんのそばに横になると，「カックンカックン」と言いながら，自分の絵本を置いてある本箱の所へ行き，薄暗い中で，たくさんの絵本の中から，『おはようミケット』(前出)をすぐに探し出して持って来る。この絵本の中の母親に抱かれている赤ん坊を「カックン」と，自分で決めていて，それを見るのを楽しみにしている。EとM児は次のような言葉を交わしながら絵本を見る。

E「ニャーンがいるよ」／M「マンマ」

E「マンマ，食べてるよ」／M「ウン」

E「カックン，いるかな」／M「アッター」（居たの意）

事例40〈昭和54.2.21（1歳7か月)〉

朝7時ごろ目をさます。昨夜，Eが枕元に置いていた絵本3冊，『かずちゃんのおつかい』（石井桃子作，中谷千代子絵，年少版こどものとも，福音館，1979，タテ21cmヨコ20cm)，『けものたちのみち』（宮崎学作・写真，かがくのとも，福音館，1979，タテ24cmヨコ21cm)，『げんたとやまんば』(松野正子作，平山英三絵，こどものとも，福音館，1979，タテ26cmヨコ19cm）を見つけて，さっそくすわりこんで見る。

『かずちゃんのおつかい』の男の子かずちゃんを「カックン」と言い，そのお母さんを「カーカ　カーカ」と言って，私に指でさして示す。お母さんが手をのばしてかずちゃんを呼んでいる絵を見ながら，「お母ちゃんが，おいでーって言ってるのよ」と言って聞かせると，すぐに真似て「オイデー，オイデー」と言う。かずちゃんが持っている花を指でおさえながら，自分から「ハナ，ハナ」と言う。今までは「アナ」だったが，きれいに「ハナ」と言えている。「お花をね，お母さんにどうぞって言ってるのよ」と言うと，「ハイ，ドージョー」と，絵本に向かって手をさしだすようにして，頭を下げながら言う。おもちゃ屋の店先にドッジボールがつってある絵を見て，「ボーウ　ボーウ」と言い，大声で「ハーイ」と言って，手をさしだす。昨日，岩井さん（隣りの奥さん）にお借りしたバレーボールを，「ハイ」と言って返したことを思い出して言っているらしいので，「おばちゃんに，ハイしたね」と言うと，「ウン」と言う。八百屋さんの店先のリンゴの絵を見て，「ギイゴ，ギイゴ」（リンゴの意）と言う。私がバナナの絵をさして「バナナよ」と言うと，「ウン」と言っただけで真似て言おうとしない。酒屋のおじさんの絵を見て，「ジーチャン，ジーチャン」と言う。「ほんとだ，おじさんね」と言うと，「カックン」と言う。「カックンのおじいさんなの？」と聞くと，「ウン」と答える

（＊当時，カックンことK君の家には祖父が来ておられて，M児はジーチャンという言葉とその意味を覚えたばかりであった）最後のページの，かずちゃんと女の子が遊んでいる絵を見ながら，「ミンミントー，カックントー」と，節をつけて歌うような感じで何度も言う。

事例41〈昭和54.2.21（1歳7か月）〉

『けものたちのみち』（前出）は，人の来ない夜や夜明けに山道を通るをけものたちの写真集である。M児は表紙のカモシカの写真を見ただけで，すっかりこの絵本が気に入ってしまう。「ミーちゃん，カモシカよ」と言うと，「シカーッ！　シカ　シカ」と言って，絵本にとびつくようにして，私の手から本を取ってしまう。そして，立ちあがって，自分の大好きなシカの絵のタオルケットを持って来て，「シカ　シカ」と言って，私に手渡す。「おんなじね。シカちゃんですねぇ」と言うと，力をこめて「ウーン」と，感きわまるような声で返事をする。小さなヒメネズミの写真を見ると，すわっているお尻を浮かすようにして手をたたいて喜んで，「チュッ　チュッ，チュッ　チュッ」と言う。私が，「小さいね。このネズミさん」と言うと，また「ウーン」と，いかにも同感といった感じで返事をする。ヒメネズミを指さして「ミンミン」，イタチを指さして「カーカ　カーカ」と言う。リスの写真を指さして「これ，何？」といった表情で私を見るので，「リスさんよ」と言うと，「ウン」と言う。「ちっちゃいね」と言うと，「チッチャーイ」と言って，リスの写真に口づけする。いかにもかわいくてたまらないといった様子である。こちらに向かって走って来るウサギの絵を見て，「ミンミーンって言ってるよ」と言うと，「ミンミーン　ミンミーン」とうれしそうにウサギに向かって言い，これまたその写真に口づけして笑う。そして，立ちあがって，おもちゃ置き場に行き，小さなバスケットをもってくる。自分であけて，「アッター」と言って，中からビニール製のウサギ型の鉛筆キャップを取り出す。これは，4，5日前，自分でバスケットの中に入れておいたもので，ウサギのことが話題になったので思い出したらしい。よく覚えていたものだと感心する。私が大げさに「ミーちゃん，覚えていたの？　その中にウサギさんがいたのを！」と言うと，「ウーン」と得意そうに返事をする。お尻が大写しになったサルの写真を見て，顔は写ってなくてもサルとわかるらしく，「キャッ，キャッ」と言う。「お尻が赤いね」と言うと，自分のお尻にさわりながら「シッコ　シッコ」と言う。テン（獣のテン）の写真は，テンと言って教えてもわからないだろうと思って，「キツネさんよ」と言って聞かせる。ふさふさしたしっぽをみて，「シッポ，シッポ」と言う。こちらを向いたそのかわいい写真にまたもやチュッと音をたてて口づけをする。「ミンミーン，遊ぼうって言ってるね」と言うと，うれしそうに「ウーン」と言う。雪の中をとびはねているヒメネズミを見て，「チュッチュッ」（ネズミの意）と言い，今度は自分から「チッチャイ」とつけくわえる。この『けものたちのみち』は，とても気に入ったらしく何度も見る。一日中，ひらいて見ているという感じであった。

事例42〈昭和54.2.21（1歳7か月）〉

『げんたとやまんば』（前出）は，内容も絵もM児にはまだちょっとわかりにくそうなので，与えないままにしておいたら，ステレオの上にあるのを見つけて，取ってもらいたがる。男の子を見て「カックン」と言っていたが，あまり興味を示さず，最後までは見なかった。

事例43〈昭和54.2.22（1歳7か月）〉

午後。Eと『けものたちのみち』を2，3回くりかえし見ていた。ヒメネズミの写真を指さして「チッチャイ！」と言い，それより大きイタチの写真を「カーカ」と言う。おサルさんのお尻は「シッコ」。テンの写真は「シッポ，シッポ」と言い，Eが「ミンミンのしっぽは？」と聞くと，自分のお尻に手をやって，「ナーイ」。すぐに「トート」と言って，Eのお尻にさわる。Eが「とうちゃん　ナーイ」と言うと，「ミンミン　ナーイ」と言う。

事例44〈昭和54.2.22（1歳7か月）〉

午後。『そらがとびたいねずみくん』（なかえよしを作，上野紀子絵，ポプラ社，1976，タテ18cmヨコ7.5 cm）を出して見ている。最後のページでコウモリが羽をとられて泣いている絵が出てくると，「イターイ，イターイ」と言い，自分の鼻をつまんでみせて，「イターイ，オアナ（鼻の意）」と言う。

事例45〈昭和54.2.22（1歳7か月）〉

午後。Eがこたつに横になって本を読んでいると，M児は，自分の本棚から『とこちゃんはどこ』（前出）を持ってEのそばに行き，Eが読んでいた本を下に置かせようとして，「オイテ，オイテ，トート　オイテー」と言う。初めて「オイテ」（置いての意）という言葉が出る。Eが本を下に置くと，すばやく『とこちゃんはどこ』をさしだして，Eに読んでもらおうとする。Eがわざと置いた本をまた取り上げて読むと，Eの腕をひっぱるようにして，「オイテー，オイテー」と言って，力づくで一緒に見ようとする。

事例46〈昭和54.2.24（1歳7か月）〉

『にわとりさん』（なかのひろたか作，わかやましずこ絵，福音館，1971，タテ21cmヨコ19cm）を見ていて，三輪車にのっている男の子の絵を見て，Eが「ミーちゃん

も，同じの，もってるね」と言うと，「ウーン」と言って，キョロキョロしながら自分の三輪車をさがす。「シャンシンシャー，シャンシンシャー」と言いながらさがす。見当たらないと，こたつのふとんをめくって，その中を見ている。私が，乾かすために，こたつの中にM児の下着やおしめカバーを入れているを見ているので，その中を覗いて見たのだろう。Eが，「あの中に三輪車があるかもしれないと思ったのかな」と言って笑う。（＊当時，買ったばかりの三輪車を，外は寒いので，部屋の中で乗せていた。ちょうどこの日の午前中，それまで「ブッブー」と言っていた三輪車のことを，自分から「シャンシンシャー」と言えるようになったばかりである。）同じく『にわとりさん』（前出）を見ていて，男の子とニワトリが同じページに出ている絵のところで，「カックンコッコ　カックンコッコ　カックンコッコ」と，続けざまに何度も言う。「カックンのコッコ」（ニワトリの意）と言っているのか，「カックンとコッコがいる」と言っているのかわからないが，「カックンコッコ」というのは，M児の作り出した合成語であった。

1歳7か月における絵本享受の実態と考察

①〈事例22〉からは，絵本が自分の所有物であるという意識をもっていたことがわかる。M児に与えた絵本は，いつでも出して見られるように，小振りな木のボックスに入れていた。M児はその前にすわって，自分が読みたい絵本を取り出してながめたり，私たちの所へ持って来たりした。自分の所有物であるという意識をもたせることは，子どもが絵本とのかかわりを強め，絵本への愛着を深める上で助けになるように思われる。

②この時期になると，イメージする力が発達してきたことがわかる事例がふえてきた。実際には見えていないことでも，イメージとして心にその映像をはっきりと描いて行動するようになった。当時，私は，「見えないものが見えるようになってきた」と目を見張る思いをしたのを覚えている。それは絵本とのかかわりの中でも日常生活の中でのちょっとした行動面でも，言葉の発達面でも観察された。

〈事例23〉で，Miffyちゃんが立っている表紙の絵を見ながら，「シュッシュー，ポッポー」と言っているのは，M児には，Miffyちゃんが電車に乗っている絵本の中味がイメージされているからである。こういう事例は，1歳6か月の〈事例17〉〈事例20〉でもすでに観察されている。〈事例37〉では，久しぶりに出してもらった『三びきのこぶた』を受けとると，すぐに「オアヨー，オアヨー」と歌いだした。これはこの絵本に出てくる柱時計をイメージしてのことである。〈事例39〉や1歳9か月の〈事例67〉も同様である。絵本の内容を，そのごく一部ではあっても，映像化できるようになったことは，M児にとって絵本を享受することがさらに楽しさや喜びをもたらすものになっていったと思われる。

③〈事例24〉は，日常生活の中での行動面で観察された映像化の事例である。父親のたてる物音を聞いただけで，実際に見ていなくても，M児には父親が何をしているのかがわかっている。イメージとして「見えないものが見える」ようになってきたことを示している。

④言葉の発達面でのイメージ化は，「ナイ」という言葉を使い始めたことである。M児が初めて「ナイ」という言葉を使ったのは，1歳7か月に入って6日目，〈事例25〉においてである。『ことばの誕生・うぶ声から五才まで』（岩淵悦太郎・波多野完治他著，昭和43年，日本放送出版協会刊）には，ジュンちゃんという男の子が，1歳3か月ごろ，飛行機の音を聞きつけて窓を開けて外を見ても飛行機が見えなかったので，「ナイー」と言ったことが記されている。それに対して波多野完治氏は，この「ナイ」について，「これは不存在の意味で『ナイ』を使ったもので，こういうナイができるようになるためには，『心の中』に，あるものの映像が存在し，ある行為をすれば（この場合は，マドをあければ）それが出てくるという期待があって，それが裏切られる，ということがなければならぬようです。つまり，心の中での映像的存在が『ナイ』の前提なのです。」と解釈されている。

ジュンちゃんと同じことが，M児にもおこったわけである。一度「ナイ」という言葉を使い始めると，M児はどんどんこの言葉を使うようになった。例えば〈事例28〉のように，外出した時，いると思っていたネコがいつもの場所にいなかった時など必ず「ナーイ」と言うようになった。〈事例26〉では，絵本の中で，窓の外に月が出ていないページとその次の出ているページを見ていてそのことに気づき，月を意味する身振りと「ナーイ」という言葉を使って，M児なりに知恵を絞って私に「このページには月がないよ」と教えようとした。波多野完治氏は，先に引用した文章に続けて，「また，この場合のナイは，多分に感動詞的な雰囲気があります。こういう感情のこもった全体的発言が凝縮して，そこからことばが発達して行くのでしょう」という深い洞察を示されている。〈事例26〉と照らし合わせて考えて見ると，そのとおりだということがわかる。月がないということに気づいたM児は，その感動的発見を私に伝えたくて，知恵を絞ったのであるが，そういう行動をとおして，表現力や対話力が

伸びていくことがわかる。

〈事例31〉は，1歳児・前半期から読んできた『とこちゃんはどこ』を見ていて，M児が〈とこちゃん〉がいないページがあることに気づいた事例である。この絵本の主人公〈とこちゃん〉は，すぐにトコトコかけだして人込みの中に紛れ込んでしまうのだが，必ずどこかにちゃんと描かれていて，その〈とこちゃん〉を探すのがこの絵本の楽しみの一つである。ところが，デパートの場面は，1階から3階までと4階から6階までとの2場面に分けて描かれていて，1階から3階までが描かれているページには,〈とこちゃん〉は描かれていないのである。それまでM児は,そのページにはほとんど関心を示さず,次のページの食堂の前にいる〈とこちゃん〉を見つけて喜んでいた。ところが,〈事例31〉で,〈とこちゃん〉のいないことに気づいたM児は，私の手をひっぱってそのことを教えようとして,〈とこちゃん〉が描かれていないページの上を指でなでながら，しきりに「ナーイ，ナーイ」と言った。「ナイには，感動詞的な雰囲気がある」という波多野氏の指摘のとおり，その「ナーイ」には，感動的響きがあった。

このようなM児の事例を見ていると，絵本を読み聞かせてきたことがイメージの力を伸ばすことになったし，イメージの力が伸びてくると,絵本とのかかわり方にも，絵本の読みとり方にもさらに深まりが出てきたことがわかる。そして言葉の発達も促されることがわかった。ここに，1歳期における絵本の読み聞かせの大きな意義を見出だすことができる。

⑤M児の場合，絵本とのかかわりをとおして新たに言えるようになった言葉が多く見られた。上記の「ナーイ」もその一つであるが,〈事例27〉〈事例33〉〈事例40〉などは，その様子がよくわかる事例である。〈事例27〉では,『おはようミケット』の中に描かれている傘の絵に気づいて，それを私に教えたくて初めて「タァサ」と言う。〈事例33〉では，歌の絵本『ぞうさん』の中の「あくしゅでこんにちは」という歌がのっているページが出ると，握手をしている絵を見て，私の手をにぎり，初めて自分から「アーシュ」と言う。〈事例40〉では，初めて見る『かずちゃんのおつかい』を私と一緒に見ながら,「オイデー」「ハイ，ドージョー」など，私の言葉をすぐに真似て言う。覚えたばかりの「ジーチャン」という言葉もさそっく使っている。また，男の子と女の子が遊んでいる絵を見て「ミンミントー，カックントー」と歌い出したが，この接続詞の「ト」は，二日前に私の真似をして言えるようになったばかりである（〈事例38〉参照)。その「ト」を適切に使いこなしている。

このような事例から，言葉を覚え始めた子どもにとって，絵本は，言葉への興味や関心をもたせ，言葉の意味を絵によってイメージ豊かに理解させること，絵本の中で気づいたことを相手に伝えようとする意欲を起こさせること，言葉を交わし合う喜びを与えるものであることなど，いろいろな面で，言葉の発達を促すことがわかる。

⑥1歳半前後から，2語文や3語文など，語の連鎖が出てくるが，M児の記録を見ていると，絵本を読んでいる場面でも，それらが観察されることが多かった。たとえば，M児が二つの語を連鎖させて一つの語をつくったことが,〈事例46〉で観察されている。「カックン」と「コッコ」という言葉を結びつけた「カックンコッコ」がそれである。その後も，このような語を連鎖させた言葉の数はふえていった。1歳8か月では,〈事例47〉の「アッチニーチャン」,〈事例53〉の「ブンブンハチ」,〈事例55〉の「シューパッパ」など，いくつかの事例が記録されている。特に,〈事例53〉の「ブンブンハチ」については，以前に語りかけていた言葉が，まるで草花の種のようにM児の中で育ち続け，ある日突然「ブンブンハチ」という言葉になって出てきたことに,「パっと花が開いたような感じがした」と，言葉を見つめてきた親としての感動が記されている。子どもの言葉は，大人が外部から与え続ける努力と，子どもの内部から育ってくる力と，その両者の好ましい共同作業の中から生まれてくるのだということを強く感じたのであった。

⑦絵本の読み聞かせは，対話力の発達の上でも役だった。対話力というのは，言葉をやりとりする力である。先に引用した『ことばの誕生・うぶ声から五才まで』の中で，波多野完治氏は，満2歳までにも言葉のやりとりは多少できるようになっているが，しかしこれは，子ども→おとな，おとな→子どもというように，「行きつ」か「もどりつ」かの一つだけだと指摘しておられる。そして，子ども→おとな→子ども，おとな→子ども→おとな，という「行きつもどりつ」，特に，前者の子どもの方から話題を出してのやりとりは，満2歳にならないと可能ではないと明言されている。ところが，M児の記録には，1歳7か月の後半あたりから，非常に単純なやりとりではあるが「行きつもどりつ」している事例がいくつか見られる。

〈事例39〉では,『おはようミケット』を父親と見ながら，父親が「ニャーンがいるよ」と，絵本の中のネコの絵をさすと，「マンマ」と言って，そのネコがマンマを食べていることを伝える。その言葉を受けて父親がもう一度「マンマ，たべてるよ」と言うと，「ウン」と答えている。極めて単純なやりとりであるが,「マンマ」と言って，

M児が話題を先にすすめたことが，このやりとりを対話として成立させている。

〈事例40〉では，『かずちゃんのおつかい』を私が読み聞かせている時，あるページまでくると，店先にドッジボールがつってあるのを目ざとく見つけて，自分から「ボーウ，ボーウ」と言い，「ハーイ」と言って手をさし出す。私が「おばちゃんにハイしたね」と言うと，「ウン」と言う。さらに，酒屋のおじさんがでてくると「ジーチャン，ジーチャン」と言い，私が「ほんとだ，おじいさんね」と言うと，「カックン」と言う。そこで私が「カックンのおじいさんなの？」と聞くと，「ウン」と答える。この事例でも，「ボーウ」「ハーイ」「ジイチャン」「カックン」など，いずれもM児の方から話題を投げかけていて，「子ども→おとな→子ども」という「行きつもどりつ」ができている。特に，後の方は，「ジーチャン」と言う話題を出し，続いてそのおじいちゃんは「カックン」のおじいちゃんだと言っている。つまり，子ども→おとな→子ども→おとな→子ども，というやりとりができている。この他にも，〈事例43〉や，１歳８か月の〈事例54〉〈事例56〉などに，同じようなパターンのやりとりがみられる。

これらは，いずれも絵本をなかだちにして成立している対話である。日常の生活場面において，このような「子ども→おとな→子ども」という「行きつもどりつ」が自在にできるようになるのは，波多野氏の指摘されるように，２歳以降の発達になると思われるが，絵本の助けがあれば２歳以前でも十分に大人との対話が成立することは，これらの事例から明らかである。そして，このような絵本を介しての対話体験の積み重ねは，子どもの対話力の発達を促すように思われる。

⑧自分の好きな絵本，興味のわかない絵本，嫌いな絵本など，絵本に対する好みがかなりはっきりと現われるようになった。〈事例40〉でM児は，初めての絵本が３冊枕元に置いてあるのを見つけてさっそく見始める。『かずちゃんのおつかい』は，主人公の男の子かずちゃんを「カックン」，そのお母さんを「カーカ」と呼んで，１ページ目から親しみをもった。私が説明する言葉をすぐに真似たり，自分の知っているものが出てくると自分からどんどん言葉を発して，１ページ１ページ，最後まで興味をもって見ることができた。自分と同じような女の子や男の子，お父さんお母さん，自分の知っている事物や生き物などが出てくる絵本，自分に理解できる行動など，身近な生活体験が描かれている絵本，このような，いわゆる生活絵本に対してとても興味を示し，すぐに好きな絵本になった。M児の大好きな『おはようミケット』や『あな』を初めて読んでもらった時も，〈事例12〉〈事例29〉に記録されているように，すぐにこれらの絵本に夢中になった。そこに自分がよく知っていることが描かれていたからである。

〈事例41〉の『けものたちのみち』は，動物の写真集である。表紙のカモシカの写真を見せて「カモシカよ」と言っただけで，絵本にとびついて，私の手から絵本を奪い取ってしまった。M児は，０歳期からシカが大好きで，その写真を見ただけでこの絵本に夢中になった。そして１ページ１ページ，かわいい小動物たちが出てくるたびに，手をたたいて喜んだり，写真に口づけしたり，感きわまりないといった声をたてたりした。その日は，読み終わっても何度も繰り返し見ていたし，次の日も〈事例43〉にあるように，父親に何度も読んでもらっていた。小動物たちの躍動感あふれる写真，そのかわいらしさ無邪気さ，生命の輝きが詩情豊かに伝わってくるこの絵本は，しばらくの間M児の愛読書になった。M児も幼いなりに，生命の輝きにふれて，動物たちをいとおしく感じることができたようである。

ところが，〈事例42〉の『げんたとやまんば』に対しては，ほとんど興味を示さなかった。昔話の形をとった創作でストーリー性が高く，絵も物語の一場面を描いていて，それだけ見たのでは，なにを意味するのかM児には理解できないものが多かった。しかも色やタッチがパステル調のぼんやりしたものなので，それもM児をひきつけなかったようである。自分にはよく理解できない内容の絵本，長いストーリーで，絵は挿絵的にかかれているような絵本，淡いタッチで，何が描かれているのか一目でパッとわかりにくい絵本，このような絵本は，この時期のM児には，まだ十分に理解できず，興味ももてないようであった。ずっと後になって，M児が３，４歳になって，長いお話も聞けるようになり，こわいお話も好きになり，やまんばについても理解できるようになったとき，この絵本はM児の好きな絵本の一冊になった。

〈事例61〉は，１歳８か月後半の記録であるが，ここで取りあげて考察しておきたい。『地獄と極楽』（野沢ともかつ文，中村ひろし絵，大道社）は，あるお寺で父親がおもしろがって買ったマンガで，M児に買ったわけではないが，M児はそれを見つけて自分で見始める。節分の時にオニのお面をかぶって遊んだりしたので，オニのことは知っていて，初めのうちは自分の知っているオニなどが出てくる絵本として興味をもって見ていた。しかしあまりにもむごたらしい描写にこわくなって，「オニ，アーワイ（怖い），アッチッテー」と本をたたいたり，押しやったりしていやがった。怖い絵や怖い内容に対して激しい嫌悪を示したことに，いささか驚いた。M児にと

って，この絵本から受けたおそろしさは，イメージのうえでの初めての恐怖体験だったと思われる。

ちなみに，M児は，5，6歳になって，この『地獄と極楽』を時々出して見るようになった。小学校にあがっても，たまに見ていた記憶がある。仏教の説く死後の世界を如実に描いているこのマンガに，何かひきつけられるものをの感じていたのであろう。その姿に，M児の心の成長を見る思いがしたのであった。

1歳8か月

事例47〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

午後。『とこちゃんはどこ』(前出）を持って来て，表紙や裏表紙にたくさんの子どもたちが遊んでいる絵の中の何人かの子どもを指でさしながら，「フン，フン」と鼻声を出して，私にその子どもの名前を言ってもらいたがる。M児が指さす男の子や女の子に対して，「それはね，あっくんよ」とか「それはね，かなちゃんよ」というふうに，遊びに来る子どもたちの名前を言ってやると，「ウーン」とか「ウン」とか言って，いかにも「そうだね」といったような顔でうなずく。少し年上の男の子を指さした時，私がだれにしようかと迷っていると，さっさと，「アッチニーチャン」と自分で言う。「昨日のおにいちゃんなの？」と聞くと，「ウン，ニーチャン」と言う。(前日，堺市の友人宅に遊びに行き，M児はそこの5歳と7歳の男の子のことを「ニーチャン」言えるようになった。その夜家に帰って，Eから「だれがいたの」と聞かれて「アッチニーチャン」と答える。「アッチ」は，「向こうの」という意味。「遠い所のオニーチャン」という意味のM児の造語といってよいであろう。年長の男の子の絵を見て，M児は，昨日の年上の男の子たちを思い出し，「アッチニーチャン」と言ったのである。)

事例48〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

私が料理の本を見ていると，「ミンミン　アッテー」(Mに貸しての意）と言って，私から本を取り，自分で開いたページの料理の写真を，一つ一つ指でおさえては，「オーシィ」「オーシィ」「オーシィ」(おいしいの意)と言う。

事例49〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

午後。おもちゃのバケツにブロックを入れて，「チンチン　オーフ，チンチン　オーフ」と，豆腐屋さんの真似をしている。そして自分で「チョーダァイ，チョーダァイ，オーフ　チョーダァイ」と言う。私がおもしろそうに見ているのがわかると，のけぞるようにして笑う。(＊当時，豆腐屋がチリンチリンと鐘を鳴らして車で売りに来ていた。)

事例50〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

午後。かなちゃん（近所の5歳になる女の子）が遊びに来て，『三びきのこぶた』(前出）を一字一字声を出して拾い読みしている。M児は，そばにすわって，「ター，アー」などと真似ていたが，かなちゃんが相手になってくれないので，Eの書斎へ行ってしまう。Eが，「おねえちゃん，何してるの？」と聞くと，「ジージ」(字の意。M児は，Eが本を読んだり原稿を書いたりして仕事をすることを「ジージ」と言っていた。）と答える。「ジージ，読んでるね」(E)，「ウン」(M)，「ミーちゃんも読んでごらん」(E)と言うと，『くまちゃんのいちねん』(前出）をEのところへ持って行き，かなちゃんの真似をして「カー，ター，アー，ヤー」などと，思いついた音を発して絵本の字を読む真似をする。

事例51〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

午後。『けものたちのみち』(前出)をやぶいてしまう。私が「あとで直してあげるからね」と言って，高い棚の上に置くと，M児は，私に向かって「アーファン，アーファン，アーファン」と言う。何のことを言っているのかわからず，「アーファンって，何のこと？」と聞くと，ちょっととまどったように黙っていたが，また，上の方を見て，「アーファン，アーファン」と言う。棚の上の『けものたちのみち』を見上げている様子なので，「ご本のことを言ってたの？　あのご本はね，おかあちゃんが，きれいきれいしてあげるからね」と言うと，「ミンミンオーファン　キエキエー」と言って，やっと自分の言っていることがわかってもらえたといった顔で，あっちへ行く。「アーファン」(ご本の意）という言葉が初めて出る。

事例52〈昭和54.3.1（1歳8か月)〉

夜。『くまちゃんのいちにち』(前出）を一緒に見ている時，魚屋さんの店先のハマグリの絵をさして，それが何か教えてもらいたがる(＊当時まだ，「ナニ」という言葉は出てきていないが，これ何？といった表情やしぐさをして，ものの名前を教えてもらいたがるようになっていた。)。「貝よ」と言うと，「カイ」とはっきり真似る。「ミーちゃん，食べたことあるでしょう」「ウン」。「おいしいのよ」「ウン」。あとでひとりで，「カイ，カイ」と言っている。

事例53〈昭和54.3.2（1歳8か月)〉

午前中。ブロックで遊んでいる時，いくつかのブロックを組み合わせて何かを作って，「ブンブンハチ，ブンブンハチ」と言って，私に見せる。「あら！　これハチなの？　ミーちゃん，かしこいねぇ」と頭をなでると，「ウーン」とかわいく答えて，走ってカレンダーのところへ行ってハチの絵を指さして，「ブンブンハチ」と言う。「ハチ」

という言葉を初めて言う。1歳前後のころ，よく『ぼくのうちのどうぶつえん』(中谷千代子作・絵，福音館，1970，タテ20cmヨコ19cm）を読んでやり，ハチの出てくるページでは，「ブンブンブン　ハチがとぶ」という歌をよく歌ってやっていた。しかし，ここ何か月間ハチが話題になったことはなかった。以前よく話しかけたり歌って聞かせたりしていた「ブンブンブン　ハチがとぶ」という言葉が，今日突然，「ブンブンハチ」という言葉になってM児の口をついて出るのを聞いて感心してしまった。一度語りかけた言葉は，畑に種をまいたように，子どもの心の中で育ち続けているのだという思いを強くする。「ブンブンハチ」という言葉を聞いて，M児の中で育ち続けた言葉が，まさにパッと花ひらいたという感じがした。

事例54〈昭和54.3.3（1歳8か月)〉

午後。『おおきなかぶ』(内田莉莎子再話，佐藤忠良絵，こどものとも，福音館，1962，タテ19cmヨコ26cm）を見ていて，イヌの絵が出てくると，自分で「イニュ」と言う。「そう，イヌよ」と答えると，すぐに「アーワイ」(怖いの意）と言う。「こわいの？」と聞き返すと，「ウン」と言う。「イニュ，アーワイ」「イニュ，アーワイ」と，2，3回くりかえす。今までイヌのことを「ワンワン」と言っていたのに，自分から「イニュ」と言う。

事例55〈昭和54.3.5（1歳8か月)〉

午前中。「オーファン　オーファン」(ご本の意）と言いながら，『あな』(谷川俊太郎作，和田誠絵，こどものとも，福音館，1976，タテ19cmヨコ26cm)をもって来る。「ご本持って来たの。読んでって言ってごらん」と言うと，M児は，絵本を私に差し出しながら「オンデー」と言う。初めて「読んで」という言葉を言う。

『あな』を見ていて，くわえタバコしたオトーサンの絵を指さし，「トート，パッパ（タバコの意)。シューパッパ，シューパッパ」と，「シュー」のところは口をすぼめて空気を吸う真似をする。EがM児の前でタバコを吸って見せたのを，そのままを真似ている。

事例56〈昭和54.3.5（1歳8か月)〉

「オコー　オコー　オコー　オコー！」(どこの意）と大きな声で言いながら，『とこちゃんはどこ』(前出）を持って来る。こたつの上に本をひろげて，「オコー」と言ってページをひらき，とこちゃんを指さして「イター」と言ってEや私を見る。「ほんとだ。とこちゃん，いたね。よかったね」と言うと，「ネー」と，いかにもうれしそうに両手を胸の前で合わせて，相づちをうつ。今まで，「アッター」と言っていたのに，「イタ」が言えるようになっている。

事例57〈昭和54.3.16（1歳8か月)〉

午前中。Eが出かける準備をしているのを見て，「ミンミン　イクー」と言って，玄関まで出て行き，ドアの鍵を開けようとしたり，自分のズックを取り出してはこうとする。私が「おとうちゃんは，お仕事だからね。おかあちゃんとお留守番してましょうね」と言うが，「イクー」と言ってきかない。Eが「ミンミン，バイバイ」と言うと，「ミンミン，イクヨー」と泣き出す。

今までは「バイバイ」と機嫌よく送り出したのに，「イク（行く)」という言葉が言えるようになって，「イクーイクー」とだだをこねる。「行く」という言葉を使えるようになったことによって，感情表出が明確になり，自己主張も強くなり，行動様式まで変わってきた。言葉が子どもの成長にもたらす力の大きさを感じないではいられない一こまであった。

事例58〈昭和54.3.16（1歳8か月)〉

『ひとりぼっちのライオン』(長野博一作・絵，福音館，1973，タテ21cmヨコ19cm）を持って来て，勝巳くん（同じアパートに住む同年齢の男の子)の前でひらき，「ウオー　ウオー」とライオンの絵をたたきながら言う。続いて，ページをくっては，「シカチャン」とか「メーメー」とか，出てくる動物の絵の説明をしている。「ミーちゃん，ご本を読んであげてるの？」と聞くと，「ウン，アーハァン（ご本の意)」と答える。今度は台所の私のところまでその本を持って来て，ページをめくりながら，「イ，ウ，イ，ア，コ，ア，エ」などと，口もとに力を入れて，唇をとがらせるようにして，1音ずつ区切って口からでまかせの音を発する。最近，遊びに来るかな子ちゃんが拾い読みをしているのを見ていて，一音一音声をあげて読む様子を真似るようになった。

事例59〈昭和54.3.17（1歳8か月)〉

午前中。こたつの上にあがり，「カーカ，アッホー」と言う。「アッホー」はヤッホーのこと。この言葉は『くまちゃんのいちねん』(前出)の中に山登りの絵があり，以前読んでやった時に，「ヤッホーって言っているのよ」と説明してやっていた。最近，上記のような場面でよく使うようになった。絵本で覚えた言葉を，すっかり自分のものにしている。

事例60〈昭和54.3.19（1歳8か月)〉

午前中。目がさめて，Kさん（泊まりに来ていた私の友人）に話かけられると，はじめいやがって顔をそむけたりしていてが，すぐになれて，自分から絵本を持って来て読んでもらおうとする。『くまちゃんのいちねん』(前出）『とこちゃんはどこ』(前出）『ロージーのおさんぽ』（パット・ハッチスン作・絵，渡辺茂男訳，偕成社，1975，タテ21cmヨコ25.5cm）など次々と持って来る。Kさんが

「ロージーがおさんぽに行ったんだって」と言うと，「ウーン」と，いかにも聞いていますよ，といった返事をする。「きつねがうしろからついてきてるね」と言うと，今度は「ネー」と，Kさんを見て小首をかしげて相づちをうつ。返事や相づちがかわいくておもしろいと，Kさんが大笑い。

事例61〈昭和54.3.20（1歳8か月）〉

夜。昨日，東大寺の三月堂に行った時，Eがおもしろがって『地獄と極楽』（中村ひろし・野沢ともかつ画，大道社，タテ25.5cmヨコ18cm）という漫画を買う。それを見つけて，表紙の閻魔大王や鬼の絵を見ていたM児が，「オニ，オニ」と言う。鬼に責め立てられる老若男女の絵を「ジーチャン」とか「ニーチャン」とか言って見ていたが，「オニ，アーワイ」（鬼怖いの意）と言って，手で閻魔大王の絵をパンパンとたたく。しまいには，「アーワイ，アーワイ，アッチッテー（アッチに行っての意）」と，私の方に本を押しやっていやがる。

事例62〈昭和54.3.22（1歳8か月）〉

午後。Eの話によると，M児は，Eに連れていってもらった奈良の本屋で，書棚においてあるゴロンタの絵本を見つけて，興奮気味に「ゴンチャン　アッター」と言って走りよって行った。4，5メートルも離れた書棚なのに，よく目についたものだと関心。「どこどこ？」と聞くと，「アッチ，アッチ」と言いながら，書棚から取ってもらいたがる。帰りのバスの中では，買ってもらった『ゴロンタのうた』『ゴロンタのおはなし』（どちらも小学館のテレビ絵本シリーズ）を夢中になって見る。（＊ゴロンタは，当時，NHKの「おかあさんといっしょ」という幼児番組に出てくる人気者のライオンで，中に人が入って動く人形である。我が家にはテレビを置いていなかったが，ご近所のお宅で見せてもらってよく知っている。）

事例63〈昭和54.3.22（1歳8か月）〉

午後。ゴロンタの絵本を見ながら，「ゴンチャン　ゴンチャン」と言って，さかんにゴロンタの写真をあれこれと指さして見せる。時には「ゴンタン」となる。クマのトムトムとチャムチャム（＊ゴロンタの友だちの，中に人が入って動く人形。）の写真を指でさして「ン？」と聞くので，「トムトム」「チャムチャム」と教えると，「ウン」とわかったようにうなずく。（何度も）うなずくだけで，「トムトム」「チャムチャム」と真似ようとはしない。

事例64〈昭和54.3.23（1歳8か月）〉

7時40分ころ，起きる。おまるにかけさせると，さっそくゴロンタの絵本を見つけて，「ゴンタン　ダー」と言って，おまるからなかなかおりようとせず，しばらくゴロンタの絵本を見ている。ゴロンタや動物たちがたくさんお風呂に入っている絵を見ていて，「ゾーシャン　ゾーシャン　シュッ　シュッ　シュー」と言って，水鉄砲をする真似をする。見ると，ゾウが鼻から水をふきあげている。

事例65〈昭和54.3.23（1歳8か月）〉

午後。かな子ちゃん（近所の5歳になる女の子）が遊びに来て，『ゴロンタのうた』の絵本を見つけて拾い読みをする。「い・ぬ・の・お・ま・わ・り・さ・ん・こ・ま・つ・て・し・ま・つ・て……」まで読んで，カタカナはまだ読めないらしく「ワンワンワワン」を読みあぐねていると，そばで聞いていたM児が「ワン　ワン　ワワーン」と歌う。かな子ちゃんはびっくりして，「おばちゃん，ミーちゃんは字が読めるの？」と聞く。

かな子ちゃんが，今度は「げんこつやまのたぬきさん」の歌詞を拾い読みしていると，M児は調子にのって，「オッパィ　ノーデー　ネンネンチテー　アッコチテ　オブチテ……」と歌う。最後の「また　あした」は，まだ言えない。

事例66〈昭和54.3.24（1歳8か月）〉

私がこたつに入っているそばで，ゴロンタの絵本を見ながら，さかんにおしゃべりしている。「ミーちゃんは，ゴロンタ好きなの？」と聞くと，「シュキ」と言う。はじめて「好き」が言える。一度「シュキ」（「スキ」と聞こえる時もある）と言えると，次々と「ゴンタン　シュキ，ミンミン　シュキ，カックン　シュキ」と「好き」を連発する。「おかあちゃんは，好き？」と聞くと，甘えたような小さな声で「カーカ　シューキーヨー」と頭をすりつけてくる。

1歳8か月における絵本享受の実態と考察

①この期に入って，M児は，絵本を見てひきおこされる感情や心情を，言葉で表現するようになった。それは言葉の発達面から見れば，見えないもの（感情や心情など）について語ることができるようになったことであり，叙述力が伸びてきたのである。

〈事例48〉でM児は，私の料理の本の写真を見て「オーシイ（おいしいの意）」と言った。それまでなら「マンマ」と言うところである。もちろん，それまでも「マンマ」という言葉の中に「おいしいね」という気持がこめられることも多かったと思われるが，それを言葉で相手に伝えることができるようになったのである。〈事例54〉では，『おおきなかぶ』に出てくるイヌを見て「アーワイ（怖いの意）」，〈事例61〉では「オニ，アーワイ」，〈事例66〉では「ゴンタン，シュキ（ゴロンタが好きの意）」，

〈事例67〉では「ブッブー，アワイヨ，アッチッテー（自動車怖いよ，あっちへ行っての意）」，〈事例68〉では「オファン　シュキ，トッテー（ご本すき，取ってちょうだいの意）」など，いずれも単純明快な言い回しで，M児の気持ちが語られている。

イヌが怖いというのは，当時，散歩の途中でイヌに吠えられ，その怖い体験からの心情の吐露である。オニが怖いというのは，『地獄と極楽』の絵に怖さを感じて思わず口をついてでた言葉である。自動車が怖いというのは，散歩の時など，いつも私から教え込まれているからである。〈事例66〉で，M児は初めて「シュキ（好きの意）」と言えるようになったが，記録を見ると，その後の何日間は「○○シュキ，△△シュキ」といった具合に，「シュキ，シュキ」の連発であった。好きなものがたくさんあるのに，それを言葉で伝えられないもどかしさがあったのだろうなと，「シュキ」と言えるようになったM児のうれしさを推し量りたくなるほどの「連発」であった。

〈事例57〉には，「イク（行く）」と言えるようになったM児の自己主張の強さや行動様式の変化が記録されいてる。当時私は，「言葉が子どもの成長にもたらす力の大きさを感じないではいられない」という感想を記している。直接目では見えないもの（感情や心情）を言葉で表現できるようになったM児の記録を読みなおしてみると，こういう言葉の獲得は，絵本を享受する上でも，大きな力になっていったと思われる。

②言葉の発達面でもう一つ特徴的なことは，「成人語」への切り替えが始まったことである。私はM児が生まれると，できるだけ育児語（いわゆる幼児語）で語りかけてきた。子どもにわかりやすく，子どもも話しやすく，言葉への興味や関心が育つ言葉だからである。M児も「ワンワン」「ニャーン」「ブッブー」「マンマ」など次々と覚えて，言葉のやりとりも自由にできるようになった。その使いなれた言葉を，自分から成人語に切り替え始めたのである。

〈事例46〉は1歳7か月の最終日であるが，それまで「ブッブー」と言っていた三輪車のことを，「シャンシンシャー」と言った。〈事例54〉では，「ワンワン」を「イニュ（イヌの意）」と言うようになった。〈事例68〉では，それまで「マンマ」と言っていたケーキの絵を見て「ケーキ」と言った。たべもののほとんどを「マンマ」と言ってきたのである。

幼児言語の研究者村田孝次氏は『幼児の言語発達』（昭和43年1月，培風館刊）において，「多くの研究が報じるところから，成人語への転向は，1歳の中ごろから終期にかけて急速に進められると結論することができる。choo-chooからtrainに，イヌがwauwauからdoti(doggie)にといったふうに，この時期に子どもの語は大きな急変をする。日本児についてもこれはまったく同様である。」と述べている。

村田氏は，また，成人語が優勢化する1歳後期までは，育児語による語りかけが言葉の発達にとって有効であるが，子どもの方から成人語に切り替え始めたら，育児語での語りかけは，むしろ成人語の発達と文の形成とを妨げる結果を生ずると指摘されている。

M児の場合も，テキストどおりに，1歳後期に入って成人語への切り替えが始まったわけである。それまで私に「ワンワン」と読んでもらい，自分でも「ワンワン」と言ってきたイヌのことを，自分から「イニュ」と言い始めた。

私は，M児が成人語に切り替え始めたのを機に，絵本の読み聞かせ方を少しずつ変えていった。それまで「ワンワン」「コッコ」などと読み聞かせていたのを，成人語で「イヌ」，あるいは，育児語に成人語を添えるようにして「コッコよ，ニワトリ」というように心がけた。そして，理解しやすい文章であれば，できるだけ絵本の文章どおりに読み聞かせることも始めた。そうすることによって，成人語への切り替えが自然に促され，文意識や文章構成力といった面での言葉の発達も自然に促されていくと考えたからである。M児もまた，そのような読みを自然に受け入れていった。

子どもが，自ら成人語へと切り替えていくようのなる1歳後半期は，子どもの言葉の発達に即して，絵本の読み与え方もまた切り替えていく必要があることを指摘しておきたい。

③この期に入って，M児は，絵本を介して人と心をかよわせ合うことが，いちだんとうまくなっていった。それは，「相づち」という行為の中にはっきりと見られるようになった。

1歳7か月も終りごろの〈事例41〉に，そのような「相づち」の記録が見られる。一目見てすっかり気に入った『けものたちのみち』を見ていた時の次のような場面である。表紙のカモシカの写真を見てすぐにシカの絵のついたタオルケットを持って来たので，「おんなじね。」と言うと，「ウーン」と，感きわまるような声で返事をする。ヒメネズミの写真を見て喜ぶので，「小さいね。このネズミさん」と言うと，いかにも同感といった感じで「ウーン」と言う。テン（動物）の写真を見て，そのかわいらしさに感動して絵本に口づけをするので，「ミンミーン，遊ぼうって言ってるね」と言うと，うれしそうに「ウーン」と言う。このようにM児は，私がM児のうれしさを

代弁するようなかたちで語りかける度に，「ソーダネ，オカーサン」といった気持ちがこもったような「ウーン」という返事をした。記録には「返事」と記しているが，「相づち」と言った方がよい「ウーン」である。それは，絵本に感動し，その感動を私と分かち合い喜び合う中で，自然に口をついてでた「ウーン」だからである。本来，「相づち」というものは，このように感動や喜びなどを感じて，相手にも共感を求めたり相手と共感し合いたい思いにかられて，思わず出てくる言葉であろう。大きくなれば，社交辞令的な心のこもらない「相づち」も言うようになるが，初めて観察されたM児の「相づち」には，相手と共感し合おうとする真情があふれていた。

その後，1歳8か月の事例の中に，このような「相づち」が多く見られるようになっていった。〈事例47〉では，『とこちゃんはどこ』を読んでいて，私の語りかけに「ウーン」とか「ウン」とか言って，いかにも「そうだね」といった顔でうなずいている。〈事例56〉では，『とこちゃんはどこ』を見ながら，M児が〈とこちゃん〉を指さして「イター」と言うので，「ほんとだ。とこちゃんいたね。よかったね」と言うと，「ネー」と，いかにもうれしそうに両手を胸の前で合わせて，「相づち」をうつ。〈事例60〉では，遊びに来ていた私の友人Kさんに，自分から本を持って来て読んでもらうのだが，Kさんが語りかける度に，「ウーン」とか「ネー」とか，Kさんのほうを見て小首をかしげるようにして相づちをうつ。Kさんが，返事や相づちがかわいくておもしろいと感心したほどであった。

「相づち」の出現は，人と喜びや楽しさを共有しようとする心的発達によるものであると考えられる。それには，絵本の読み聞かせが大いに役だったと思われる。つまりM児は，0歳期からの絵本の読み聞かせをとおして，一つには絵本に喜びや楽しさや感動を見いだせるようになっていった。もう一つには，その喜びや楽しさや感動を，父親や母親と共有することができるようになっていった。この両方の発達が一つに合わさって初めて，このような「相づち」が出てくるように思われる。

④もう一つ注目したいのは，〈事例60〉に見られたように，自分の知らない人（この場合はKさん）に対しても，絵本をなかだちにして言葉を交わしたり，心をかよわせ合っていることである。波多野完治氏は，『ことばの誕生・うぶ声から五才まで』（前出）の中で，満2歳までの子どもは，あまり見たことのない人とは口をきくこともむつかしいとして，例えば，はじめての人に「あんた，いくつ」と聞かれて「ミッツ」と答えることができるかどうか，これが満2歳以後の成長にかけられる試練であると述べておられる。

確かに，この時期の子どもが，初めて知らない人と話ができるようになるということは，「試練」という言葉が当てはまるほどに大変なことだと思われる。M児の場合は，その大変な「試練」を，絵本に助けられながら，早々としかも楽々と乗り越えることができたように思われる。〈事例60〉での絵本をとおしてのKさんとのやりとりにも，そのことがうかがえる。1歳9か月に入って間もない〈事例68〉は，そのことがさらにはっきりとわかる事例である。M児は，病院の待合室で，隣りにすわり合わせた年配の女性に，自分から絵本を手渡して，読んでもらおうとしたのである。その方がやさしく相手になってくださって，絵本の絵を指さして「これはなに？」と聞かれる度に，M児は次々に「シンブン」「クック」「ケーキ」などと答えていった。相手が年配の女性であるという安心感もあったと思うが，見ず知らずの人に心を開いて言葉のやりとりができたというとはことは，この時期にすでに自ら人とかかわっていこうとする意志やかかわり方を，自然に身につけてきているということである。「試練」ではなくて「自然にできた」というところに，0歳からの絵本の読み聞かせの成果や効果の一端を見ることができよう。

⑤〈事例50〉〈事例58〉は，絵本の読み方には，字を読む読み方もあるらしいことに気づいてきた事例である。それまで絵の読みとり中心の読み方をしてきたM児は，いつも遊びに来るかなちゃんが，1音1音声をあげて拾い読みをしはじめたのを見て，深い印象を受けたようであった。〈事例50〉では，そばにすわって，さっそく真似しはじめたが，かなちゃんが相手になってくれないので，父親の部屋に行ってしまう。父親に「おねえちゃん，何してるの」と聞かれて，「ジージ（字の意）」と答えているところを見ると，かなちゃんが字を読んでいることがわかっているのである。「ミーちゃんも読んでごらん」と言われて，『くまちゃんのいちねん』を見ながら，1音1音区切るように音を発して，拾い読みの真似をする。

〈事例58〉では，同年齢の友だちK君が来た時，M児より体格の小さいK君を，自分より赤ちゃんだと思っていて，自分が私に読んでもらったように，「ウオーウオー」「シカチャン」「メーメー」などと，絵を指さしながら，読み聞かせる。その同じ絵本を，私には，「ア，イ，ア，コ，ア，エ……」などと，かなちゃんの拾い読みの真似をして読む。年上の子どもたちはこんな読み方をするものだというイメージができあがっているらしく，自分はもうこういう読み方もできるよという，M児の誇らしさが伝わってくる読み方であった。

かなちゃんの拾い読みに触れるという偶発的な体験ではあったが，M児にとって，絵本の読み方に対して新しい興味がひろがった体験であった。

⑥〈事例62〉〈事例63〉〈事例64〉〈事例65〉は，NHKテレビの幼児番組「おかあさんといっしょ」の人気者ゴロンタが載っている絵本を買ってもらった時の記録である。当時，我が家にはテレビを置いていなかったが，M児はご近所の友だちのお宅で見せてもらったり，「おかあさんといっしょ」で歌われる歌（ゴロンタ音頭など）のレコードを買ってやっていたので，ゴロンタのことはよく知っていて，レコードをかけてもらっては，遊びに来た子どもたちと一緒に，歌ったり踊ったりもしていた。また，自分の大きなラオインの縫いぐるみをゴロンタに見立てて，「ゴンチャン」とか「ゴンタン」とか呼んでいた。つまり，家にテレビはなくてもM児はゴロンタの大ファンだったのである。

〈事例62〉は，父親に連れて行ってもらった本屋で，大好きなゴロンタの載っている本を見つけたのであるが，その時のM児の興奮ぶり，その本を買ってもらった時の喜びように父親は驚いたと言う。そして，〈事例63〉〈事例64〉〈事例65〉に見られるように，しばらくの間，M児はこの2冊の絵本に夢中であった。私はその様子を見ながら，テレビのアニメーションや，人形劇（動物たちの縫いぐるみの中に人が入って動きまわる劇）が，幼い子どもの心をどれほど強く引きつけるものであるかを，あらためて考えさせられた。

ところで，M児の場合，大好きなゴロンタが大好きな絵本になっていたことは，大きな驚きであり，喜びだったようである。それまでにM児が出会った絵本のほとんどは，絵本作家が子どものために何等かのメッセージをこめて作ったものである。それに比べてこのゴロンタの絵本は，テレビに出てくるゴロンタたちをいろいろに紹介しているといった形のもので，いわゆる，情報を満載したグラビア雑誌といったところである。つまり，M児にとっては新しいタイプの「絵本」との出会いであった。

一般には，この種の「絵本」は好ましくない絵本として受けとめられがちであるが，〈情報誌〉としての観点から見ると，また別のとらえ方ができる。「絵本」というものが，自分にどんな楽しみや喜びを与えてくれるのか，いろいろな絵本体験をとおして，子ども自らそのことを知っていくこともまた大切なことのように思われる。

1歳9か月

事例67〈昭和54.3.27（1歳9か月）〉

午前中。昨日，Eが大学から持って帰った，谷川俊太郎の〈ことばのえほん〉『ピヨピヨ』（谷川俊太郎作，堀内誠一絵，ひかりの国，1972，タテ20cmヨコ20.5cm）『かっきくけっこ』（同上）『あっはっは』（同上）を，M児は，久しぶりに手にして，なつかしいとでもいうように，さっそくすわりこんで見る。（＊これらの絵本は，1歳2か月くらいの時，よく見ていた絵本である。）

『ピヨピヨ』は，絵本をひらく前から「トントン。ジィチャン　トントン」と言う。男の人が金槌で釘を打っている絵をまだ覚えていたらしい。『ピヨピヨ』の中の，おんどりの絵を見て，「コッコッコッコッ，コケッコ」とか「コッコッコッコッ，ケケッコ」と鳴き真似をする。「これ，何？」と聞くと，「コッコシャン」と言う。同じ絵本の中のヘリコプターの絵を見て，私が「シュバシュバだ。ヘリコプターよ」と言うと，「チュバ　チュバ　チュバ　チュバ」と，うれしそうに体を左右にゆすって言う。トラックの絵が出ると，「ブッブー，アワイヨ。アッチテー」（「自動車怖いよ，アッチに行って」の意）と，車の絵を押しのける動作をする。

『あっはっはっは』では，1ページ1ページめくりながら，そこに描かれているいろいろな笑い方を，読んで聞かせると，ほとんどの笑い方を，次のように，おもしろそうに真似る。

私「アッハッハッハッ」／M「アハハハハ」
私「イヒヒヒヒ」／M「ヒヒヒ」
私「エッヘッヘ」／M［エッエッー」
私「オホホホホ」／M「ホッホッホッホー」
私「プーッ」／M「ウプーッ」（口に手をあてて）
私「プンプン」／M「プンプン」

事例68〈昭和54.3.28（1歳9か月）〉

午前中。病院の待合室で。『くまちゃんのいちにち』（前出）を出してやると，その本を，隣りにすわっている年配の女性に手渡して，読んでもらおうとする。その方が「これは何？」「これは？」と，絵本の中に描かれている絵をあれこれ指さして聞かれると，自分の知っているものだと，「シンブン」「クック（くつ）」などと，はっきりと答えている。その中で，みんなでおやつを食べる場面の絵の中のケーキの絵をさして，「これは？」と聞かれた時，M児は，はっきり「ケーキ」と答える。初出である。今までは，ほとんどの食べ物が「マンマ」でかたづけられていたのに，このごろは，その一つ一つの名前について興味をもち始めている。ケーキという言葉は，生活の中でM児もよく耳にしている言葉であるし，その意味もよく知っているが，今までM児はケーキも他の食べ物同様，「マンマ」の一点ばりだった。

事例69〈昭和54.3.29（1歳9か月）〉

夕方，お向かいの史ちゃん（当時，中学生の女の子）が，本を借りに来る。M児はさっそく遊んでもらおうと，史ちゃんが玄関正面の本箱の前に立っていると，「アッチイコー」と手をひっぱったり，史ちゃんの見ている本棚に入っている幼児向けの絵本をさして，「オファン　シュキ，オファン　シュキ。トッテー」とねだる。私にまだ出してもらえない絵本を，この時とばかり，史ちゃんに出してもらって喜ぶ。

事例70〈昭和54.4.13（1歳9か月）〉

『あかいりんご』(なかのひろたか作・絵，福音館，1971，タテ14.5cmヨコ15cm）を読み聞かせる。とてもおもしろがるので2回繰り返して読む。読み終わると，「ウシャギハ？」「ウシャギハ？」と，何度も聞く。ウサギの出てくるページを開いてもう一度そこを読んでやっていると，そこに出ているキツネをさして「コデ，ナニ？」(「これ何」の意）と聞く。「キツネさんよ」と答えると，「ウン。アーワイ」(怖いの意）と言う。「キツネさんがリンゴちょうだいって言ってるね」と言うと，ウサギがキツネにリンゴを持って行かれてしょんぼりしている絵を見て，「エーン　エーン」と言う。「そう，ウサギさんはエーンエーン言ってるね」と言うと，うなずく。さらにページをめくって，クマがリンゴをはきだした場面では，「クマシャン，ベーベーシタ」と言う。そして，すぐに，「ムイムイネー，ギンゴニ」(「虫がいるね，リンゴに」の意）と言う。

事例71〈昭和54.4.14（1歳9か月）〉

夜。「ギンゴノ　オファン　オンデ」(「リンゴのご本読んで」の意）と言って，『あかいりんご』(前出）を読んでもらいたがる。絵本を開く前から，「ウシャギイウネー」(「ウサギ　いるね」の意）と言って，ウサギが出てくるのを，楽しみにしている。ウサギがリンゴをだいているページのところで，「ここ，おかあちゃんに読んで」と言うと，ちょっと絵を見ていたが，「オイシイ　オイシイ　ギンゴシャーン（リンゴさんの意)」と言う。ここの場面の文章は，「おいしい　おいしい　リンゴさん　ごちそうになりますよ」と書かれている。昨日何度も読んで聞かせたので，それを覚えていて，こう言う。

1歳9か月における絵本享受の実態と考察

①M児は，1歳9か月と7日目（昭和54年4月1日）から，保育園に通い始めた。私が大阪教育大学及び大阪府医師会看護専門学校の講師として仕事を始めたためである。そのため，M児と一緒にいる時間は少なくなり，私も新しい仕事の準備で忙しくなり，それまでのような詳しい育児記録がとれなくなった。しかも，当時は，M児の言葉の発達面に重きをおいた記録を取っていたため，その後も細々と続けていた記録のほとんどは，新しい語彙や言い回しの出現，保育園での様子などが中心になった。絵本に関する記述で事例として取りあげることができるものは，〈事例71〉を最後に，しばしストップしてしまった。

〈事例67〉〈事例68〉については，1歳8か月ですでに考察の対象として取りあげたので，ここでは，〈事例69〉〈事例70〉〈事例71〉について考察を加えたい。

さて，〈事例69〉を見ると，本を借りに来たお向かいの中学生の女の子にまつわりつき，本棚から絵本を取ってもらおうとしたり，読んでもらおうとする。その時のM児の「オファン　シュキ」(「ご本好き」の意）という言葉には，この期までにM児の中で育ってきた絵本への愛着が，いみじくも吐露されているようで，感慨深いものがある。また，この言葉から，1歳児・後半期の残りの2か月間も，記録には残っていないが，ますます絵本とのかかわりを深めていったであろうと予測することができる。

②この予測は，〈事例70〉〈事例71〉を見るとさらにはっきりとしてくるので，最後にそのことについて考察をしておきたい。

私は，1歳8か月に入ってM児の言葉が成人語に切りかわり始めたころから，M児に理解できるものであれば，なるべく絵本の文章をそのまま読み聞かせるようにしていた。『あかいりんご』は，ストーリーの展開も単純でおもしろく，リズミカルな文章と絵がよくマッチしたわかりやすい絵本なので，文章どおりに読み聞かせた。ストーリーは次のとおりである。

あかいリンゴを見つけたスズメがリンゴを食べようとすると，ウサギがそれを取りあげて食べようとする。すると，キツネその次にオオカミ最後にクマというふうに，強い動物が次々に現われてそのリンゴをを取りあげていく。ところがクマはリンゴをかじって吐き出してしまう。虫食いのリンゴだったのである。スズメがその虫をおいしそうに食べる。

M児はこのお話をおもしろがって2回繰り返して聞き，読み終わると，ウサギに興味を示して，そこのところをあらためて読んでもらいたがる。そして，リンゴをキツネに持って行かれたウサギの気持ちを「エーン，エーン」(泣き声）と自分で解釈したり，顔をしかめてリンゴを吐き出したクマを見て，「クマシャン，ベーベーシタ」と自分の言葉で説明する。本文では，「うわっ！　まずい。

ぺっぺっ」となっている箇所である。しかも，まだリンゴから虫が這い出すページを開いていないのに,「ムイムイネー，ギンゴニ」と言う。なぜ吐き出したか，その理由が初めの２回の読み聞かせで理解できているのである。つまり，話の展開や，出てくる動物たちの気持ち，なぜリンゴを吐き出したのかなど，この物語の内容がほぼ理解できていることがわかる。さらに,〈事例71〉を見ると，前日に読み聞かせた本文の一部をちゃんと覚えていて，「オイシイ　オイシイ　ギンゴ（リンゴの意）シャーン」と，本文どおりに言うことができた。

この二つの事例を見ると，話の筋や登場人物の気持ちの理解，言葉の言い回しや文章の模倣などが，M児なりにできるようになっている。記録はとれなかったが，おそらく，１歳９か月以降も，絵本の内容，言葉，筋などを自分なりに理解し，絵本の世界を丸ごと楽しむことができるようになっていたと思われる。

ちなみに，２歳２，３か月からは，再び絵本に関する記述も見られるようになり，M児は，ストーリーの展開やお話の筋に興味を示し，次はこうなるとい見通しや期待をもちながら絵本を読んでもらうのを楽しむようになっている。

おわりに

以上，M児の育児記録から，１歳児・後半期（１歳６か月～１歳９か月）における絵本享受の実態を事例をあげて詳しく報告し，考察を加えてきた。

この考察をとおして，この時期の子どもがどのように絵本を受けとめるのか，この時期の子どもの言葉の発達が絵本によってどのように促されるのか，この時期の子どものイメージの力（映像化）が絵本によってどのようにひきだされてくるのか，この時期の子どもが絵本の内容や絵をどこまで理解できるようになるのか，この時期の子どもが身近な人と同じ世界を共有する喜びや楽しさを，絵本がどのように与えてくれるのか，また，この時期の子どもが知らない人とかかわれるようになる上で，絵本がどのような役割を果すのか，これらのことを，具体的に明らかにすることができたのではないかと思う。

この度，育児記録を読み直して見て，私は，あらためて，絵本の読み聞かせが，０歳，１歳というごく幼い子どもの心や言葉の発達に大きな影響を与えることを確認することができた。しかし，それ以上に，この時期から絵本を読み聞かせてよかったと思うことは，絵本というものが自分になにをもたらしてくれるものであるか，そのことを子ども自身が知識や理屈ではなく，無意識のうちに肌身で感じて育ったということである。物心ついた時には，もうすでに絵本が大好きで手放せなくなっていた。１歳期における絵本の読み聞かせは，難無く子どもをそういう世界に送り込むことができる。私は，そこに，この期における絵本の読み聞かせの大きな意義があったと考えている。

この「幼児と絵本に関する研究」は，育児記録をもとにして行った臨床的研究である。この研究をとおして，０歳児・１歳児の絵本享受の実態と，絵本享受をとおしてみられる幼児の言語発達の様相を，ある程度明らかにできたものと考えている。